

かに

KANI



公益財団法人 がん研究振興財団

第47号 2020

表紙のことば

癌と云う病気の概念がはっきりしたのは、19世紀中葉以後の事であるが、癌と云う言葉自体は、東西ともに可成古くから行われている。英仏語の Cancerは、ラテン語のまま、蟹の意味を兼ねている。そして、このラテン語はまたギリシャ語のカルキノスから来ている。2,400年前のギリシャのヒポクラテスは、すでに病気としてのカルキノスの特徴を書き記したと云う。西紀200年に死んだローマの医師ガレノスは、カンケルを「時に潰瘍を伴う悪性の極めて硬い腫瘍」と定義した。蟹の字をこう云う病気の名にしたのは、昔から珍しくない乳癌の恰好が、蟹を連想させたからであろう。赤黒い、凹凸のある、醜いその外観は、まさに蟹の甲羅そのものだが、腋の下のリンパ腺まで病気が拡がり、しかも、その間を繋ぐ、リンパ管までおかされた、乳癌の末期の姿は、蟹の鉗やその足の節々をさえ、連想させる。

一方癌の字は、中野操氏の考証によれば、南宋の医書にすでに用いられているそうだ。病だれの中の品山は岩石の意味で、やはり皮膚癌や乳癌の外観からの表徴文字と察せられるが、この字は癌の組織の持つ大きな他の特徴——他の組織と比較にならぬ程、堅い性質——まで表示し得て、妙である。

表紙の絵は「がざみ」と呼ばれる「わたりがに」の一種で、太平洋の日本近海に普通の、食用蟹の一つである。海底の砂に巧みにもぐり込み、しかも、海を渡って遠くにまで行く。癌の持つ周囲組織へのもぐりこみ（浸潤）や、方々への飛び火（転移）は、この蟹の性癖で巧みに表現されている。

題字の達筆は藤井理事長の揮毫である。編集部苦心の作と察せられるこの加仁は、草書では「かに」となる。仁術に加えるもう一つのもの——一般人の理解と協力——なくしては、癌撲滅の大目的は達成し得られない事を、言外にうたっているものと云えようか。蟹の周囲のあみ目の一つ一つは癌の細胞である。

(久留 勝・くる まさる；国立がんセンター第3代総長)

公益財団法人がん研究振興財団の概要

沿革

- 昭和40年12月 「がん研究振興会」として発足
- 昭和43年 9月 厚生省より「財団法人がん研究振興会」として認可
- 昭和59年 3月 寄付行為改正により「財団法人がん研究振興財団」に名称変更
- 平成24年 4月 内閣総理大臣より「公益財団法人がん研究振興財団」として認可
(公益認定)

設立の経緯

遡ること約半世紀前の「がん」の状況は、社会においても家庭においてもかけがえのない立場にある年齢層の人達の健康にとって最大の脅威となっており、医学の進歩をもってしてもなお、未知の分野を多く残していました。

国のがん対策は、昭和37年我が国初のがん専門病院として国立がんセンターが開設され、専門的な研究、診断、治療が行われました。

当財団の設立に当っては、「がん」について医学的にも未知の分野が広く、研究すべきことが山積した状況の中で、官民一体となり、国費のほか一般の方々からの浄財を以てがんの治療、予防技術の開発事業を行うため、昭和40年12月「がん研究振興会」として発足し、その後昭和43年9月、初代会長に経済団体連合会会長であった石坂泰三氏、副会長に富士銀行頭取の岩佐凱實氏、理事長に八幡製鉄副社長藤井丙午氏、常務理事に経済団体連合会専務理事花村仁八郎氏による経済界を挙げての組織体制により厚生省から財団法人として認可設立されました。

昭和59年度からは、国による「対がん10か年戦略」に伴う事業を実施するため、昭和59年3月名称を「財団法人がん研究振興財団」と改め、推進事業を30年に亘り実施して参りました。

また、平成24年4月に内閣総理大臣から全事業を公益事業とする公益認定を受けております。

事業内容

- (1) がん研究に関する研究の助成
- (2) がん研究に関する国際協力及び国際交流
- (3) がん研究に関する若手研究者の育成
- (4) がん研究に関する国民への情報発信
- (5) がん研究に関する国内外諸団体との連携及び協力
- (6) その他本財団の目的を達成するために必要な事業

がん研究振興財団の変遷

年月日	事 項	内 容
昭 40.12. 1	任意団体 「がん研究振興会」設立	昭和 37 年国立がんセンターが開設されて以来、多数の方々からがん研究振興にと寄せられた浄財を最も有効に具現する方法として、国立がんセンターのみならず、その他の研究機関に於いても活用できるように、とりあえず任意団体として設立。
昭 43. 9. 2	公益法人 「財団法人がん研究振興会」設立 1. 会 長 石坂 泰三 副 会 長 岩佐 凱實 理 事 長 藤井 丙午 常任理事 花村仁八郎 2. 基本財産 2,000 万円 3. 本会の目的 がんその他の悪性新生物（以下「がん」という）に関する研究を助長奨励すると共に、これら疾患の最新の診断治療方法の普及を促進し、もって国民の健康と福祉の増進に寄与する。 4. 本会の事業 (1) 「がん」に関する研究 (2) 「がん」に関する診断治療技術の開発の助成 (3) 「がん」の研究者および診断治療に関する技術者の教育訓練の実施の助成 (4) 「がん」に関する情報の提供 (5) 「がん」に関する内外諸団体との連絡および協力 (6) その他の目的を達するために必要な事項	新財団の設立については、既存の団体との調整の問題もあり、若干紆余曲折はあったが、石坂泰三氏、岩佐凱實氏、藤井丙午氏、長沼弘毅氏、花村仁八郎氏等のご斡旋によって財界方面の協力が得られるめどもつき、また監督官庁の了解も得られて発足。 本会は、本会の目的に賛同された団体又は個人の賛助会員によって拠出される会費によって維持されることになっているが、このほか、患者又はその家族による篤志寄附もある。さらに最近では、がんの問題に関心を持たれた一般の方々による篤志寄附がある。このような情勢に備えて、本会は所得税法及び法人税法による免税措置の対象となる法人（科学技術に関する試験研究を行う者に対する助成金の支給を主たる目的とする法人）として認可された。
昭 59. 1.26	天皇皇后両陛下よりご結婚 60 周年を記念して御下賜金が厚生大臣より下賜された。	御下賜金を核として各界からの浄財を募って、がん対策振興基金（目標 10 億円）を造成する。
昭 59. 3. 1	財団法人がん研究振興財団に名称変更寄附行為の一部変更認可。 1. 会 長 岩佐 凱實 理 事 長 山本 正淑 常任理事 花村仁八郎 2. 基本財産 1 億 3,100 万円 3. 本財団の目的 がんその他の悪性新生物（以下「がん」という）に関する研究を助長奨励すると共に、これら疾患の最新の診断治療方法の普及を促進し、もって国民の健康と福祉の増進に寄与する。	昭和 58 年 6 月 7 日、中曽根総理大臣が提唱された「対がん 10 ヶ年総合戦略」事業が、がん対策関係閣僚会議において閣議決定された。 これら事業の一翼を担うこととなり、昭和 59 年 3 月 1 日、寄附行為の一部変更が認可された。 従来事業の他に「対がん 10 ヶ年総合戦略」事業として 7 つの特別会計事業を実施。

年月日	事 項	内 容
昭 59. 3. 1	<p>4. 本財団の事業</p> <p>(1) がんその他の悪性新生物に関する研究の助成</p> <p>(2) がんその他の悪性新生物に関する診断治療技術の開発の助成</p> <p>(3) がんその他の悪性新生物に関する研究の国際協力及び国際交流</p> <p>(4) がんその他の悪性新生物の研究者及び診断治療に関する技術者の育成</p> <p>(5) がんその他の悪性新生物に関する研究の推進のための支援</p> <p>(6) がんその他の悪性新生物に関する情報の提供</p> <p>(7) がんその他の悪性新生物に関する内外諸団体との連絡及び協力</p> <p>(8) その他この財団の目的を達成するために必要な事業</p>	
昭 59. 8. 9	高松宮妃殿下よりがん研究振興のためにと金一封を賜る。	
昭 60. 8.31	国際研究交流会館竣工	<p>国際研究交流会館は、「対がん 10 ヶ年総合戦略」事業の円滑な実施のために活用することを主眼として自転車振興会補助事業の助成により完成した。</p>
平 24. 4. 1	<p>内閣総理大臣より「公益財団法人がん研究振興財団」として認可</p> <p>1. 会 長 大竹 美喜 理 事 長 高山 昭三 専務理事 北井 暁子</p> <p>2. 基本財産 22 億円</p> <p>3. 目 的 本財団は、がんに関する研究の推進を図るため研究助成を奨励するとともに、その成果を国民に還元・普及を図り、もってがんの予防・診断・治療に寄与することを目的とする。</p> <p>4. 事 業</p> <p>(1) がん研究に関する研究の助成</p> <p>(2) がん研究に関する国際協力及び国際交流</p> <p>(3) がん研究に関する若手研究者の育成</p> <p>(4) がん研究に関する国民への情報発信</p> <p>(5) がん研究に関する国内外諸団体との連携及び協力</p>	<p>(定款 附則)</p> <p>1 この定款は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第 106 条第 1 項に定める公益法人の設立の登記の日から施行する。</p> <p>2 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第 106 条第 1 項に定める特例民法法人の解散の登記と公益法人の設立の登記を行ったときは、第 8 条の規定にかかわらず、解散の登記の日の前日を事業年度の末日とし、設立の登記の日を事業年度の開始日とする。</p> <p>3 本財団の最初の代表理事（会長）は河野俊二、代表理事（理事長）高山昭三、業務執行理事（専務理事）は北井暁子とする。</p>

年月日	事 項	内 容
平 24. 4. 1	<p>(6) その他本財団の目的を達成するために必要な事業</p> <p>前項の事業は本邦及び海外において行う。</p>	<p>4 本財団の最初の評議員は、次に掲げる者とする。</p> <p>荒蒔康一郎 栗山 泰史 佐藤 禮子 下遠野邦忠 田島 和雄 中釜 齊 中川原 章 野田 哲生 宮園 浩平</p>
平 29. 4. 1	がん研究振興財団事務所移転	<p>(旧) 東京都中央区築地5-1-1 国際研究交流会館内 (新) 東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階</p>

巻頭言

がん研究支援について財団に期待すること

京都大学大学院医学研究科 教授／がん看護専門看護師

ともいき京都 代表 田 村 恵 子 6

特集1 国際がん研究シンポジウムについて

国立がん研究センター 研究所長・がんゲノム情報管理センター長 間 野 博 行 8

特集2 2019年度がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナー開催報告

跡見学園女子大学マネジメント学部教授 石 塚 正 敏 12

京都大学大学院医学研究科 教授／がん看護専門看護師

ともいき京都 代表 田 村 恵 子 18

2019年度事業実績

がん研究助成審議会報告 垣 添 忠 生 24

海外派遣研究助成委員会報告 関 谷 剛 男 33

看護師・薬剤師・技師等海外研修選考委員会報告 桑 原 節 子 40

H O P E 事業等運営委員会報告 上 田 龍 三 44

がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会報告 石 塚 正 敏 47

事業実績1984～2019 51

2020年度事業計画 63

ご寄付芳名録 66

役員・評議員・顧問名簿 67

あとがき 68

がん研究支援について 財団に期待すること

京都大学大学院医学研究科 教授 / がん看護専門看護師
ともいき京都 代表
田村 恵子



まず初めに、新型コロナウイルス(COVID-19: Coronavirus disease 2019)感染症により亡くなられた方とご家族に心よりお悔やみを申し上げます。また、現在治療中の患者さん・ご家族の皆さんにお見舞い申し上げます。そして、世界各地でCOVID-19感染症の治療・ケアにあたられている医療従事者の皆様へ心からの感謝とエールをお送りいたします。

さて、この度は、創立50有余年の歴史を有する「公益財団法人がん研究振興財団」機関誌である「加仁」の巻頭言執筆の機会を頂き、身に余る光栄に存じます。

本財団の事業内容は何かと問われると、多くの方々は広報活動事業の一環として毎年発刊されている『がんの統計』を思い浮かべられるのではないのでしょうか。私も『がんの統計』は手放せず、常に手元において折に触れて活用させて頂いています。英語表記があることもとても役立っています。今後とも発刊を続けていきたいと願っています。

広報活動事業、特にパンフレットや冊子についての感想をもう少し続けたいと思います。「食

事に困ったときのヒント」を契機に、食事サポートに関する冊子が継続して発刊されています。「がん治療中の食事サポートブック2018」、「こころとからだを支えるがんサバイバーのためのかんたんおいしいレシピ1・2」、そして今年はケアのポイントを含めた「多職種から学ぶ：がん看護の基礎（食事を支えるケア編）」が発刊されています。栄養と食事に関することはがん治療や体力の回復・維持にとどまらず、精神的な満足や家族とのつながりなどより深い意味を持つものです。このためがん患者とその家族にとってはとても関心の高いテーマです。上述した冊子はこうした関心にしっかりと応えることのできる内容であり、一目で見てわかるような工夫が随所にちりばめられています。患者さんやご家族に責任をもって紹介できています。

さて、次に本巻頭言のテーマであるがん研究支援についての財団への期待について述べたいと思います。本財団は平成27年度より「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築を目指した研究」課題解決に向けた支援事業を実施しています。余談ですが、今回、私が巻頭言を執筆させていただくことになったのは、私がか

んサバイバーシップ支援に関心を持ち、昨年度の研究成果発表会に参加したことに端を発しています。すなわち、本財団ではがん医療の目覚ましい進展に伴ってがんと共にその後の人生を生きる人への支援が重要であるとの認識から、他の財団に先駆けて本事業を創設されています。研究支援事業の助成を受けた研究はどれもとてもユニークであり、エビデンスは追及しつつもそれだけでは提示することのできない研究成果にもしっかりと光を当てておられます。是非、この点は今後も大切にしていきたいと思えます。

最後に研究という枠組みには入らないことを承知の上で、私たちが取り組んでいるようながんサバイバーを対象とした支援プログラムの企画・運営も支援の対象とすることを検討して頂けることを願っています。周知のとおり、こうした活動に対する助成を継続して受けることはかなり難しいことです。私も例年、夏を過ぎる頃になると「来年はどうしようか」という考えが頭から離れない状態になります。考え続けて何とか助成を受けることができるのであればいいのですが、残念ながら何の保証もありません。おそらくほとんどのがんサバイバー支援プログラムは同じような状況で運営されていると推察されます。もちろん運営側にももっと工夫が必要であり、運営に必要な経費を賄えるようなシステム作りは不可欠であると思いますが、できれば本財団の事業の柱に加えていただけること

を切に希望いたします。

がん医療・看護の充実に志を傾注してきた看護師の一人として、これからも本財団ががん研究支援の中心的な役割を果たされますことを期待しています。

国際がん研究シンポジウムについて



国立がん研究センター
研究所長・がんゲノム情報管理センター長
間野 博行

はじめに

腫瘍及び正常部のゲノム解析に基づき、患者に最適な治療（あるいは予防）を行う医療行為を「がんのゲノム医療」と言います。令和元年は日本においてがんゲノム医療が国民皆保険の下で開始された記念すべき年となりました。厚生労働省において平成29年にがんゲノム医療推進コンソーシアムが開催され、日本においてがんゲノム医療を行うための必要な体制が議論されてから約2年の歳月を経て、いよいよ正式に発足したことになります。これを受けて、令和元年度の国際がん研究シンポジウムは「がんゲノム医療の現状と未来」のテーマで、海外演者を含む14名の演者からなる有意義なシンポジウムとして令和2年3月26日～27日に開催することを予定しておりました。事前参加申し込みの数も200名を超え、盛大なシンポジウムが開催される予定でしたが、おりしも新型コロナウイルスの感染拡大の時期と重なってしまい、誠に残念ながらシンポジウムの中止を決断するにいたりました。せっかく参加申し込みをしていただい

た方々にお詫び申し上げると共に、本シンポジウムの実現に向けて努力してくださった組織委員の皆様、ご講演を承諾くださった演者の皆様、また事務局に篤く御礼申し上げます。

日本のがんゲノム医療体制

がんゲノム医療においては、抗がん剤の選択に関連する数百種類の遺伝子の塩基配列を調べる「がん遺伝子パネル検査」を行い、その結果に基づいて治療薬を選ぶことになります。日本は国民皆保険制度を採用していますので、がん遺伝子パネル検査を保健医療の中に組み込もうとすると、様々な社会基盤が必要になります。

例えば図1に示す様に、病院では医療者ががんゲノム医療を適正に患者に説明しインフォームドコンセントを得る必要があります。次に、検査施設では品質保証下で患者検体に対してがん遺伝子パネル検査を行うことになります。さらには、患者検体で見つかった遺伝子変異に対応する薬剤などの臨床的意義付けを行った検査レポートを作成することが重要で、そのためには専用のがんゲノム医療用知識データベースが必

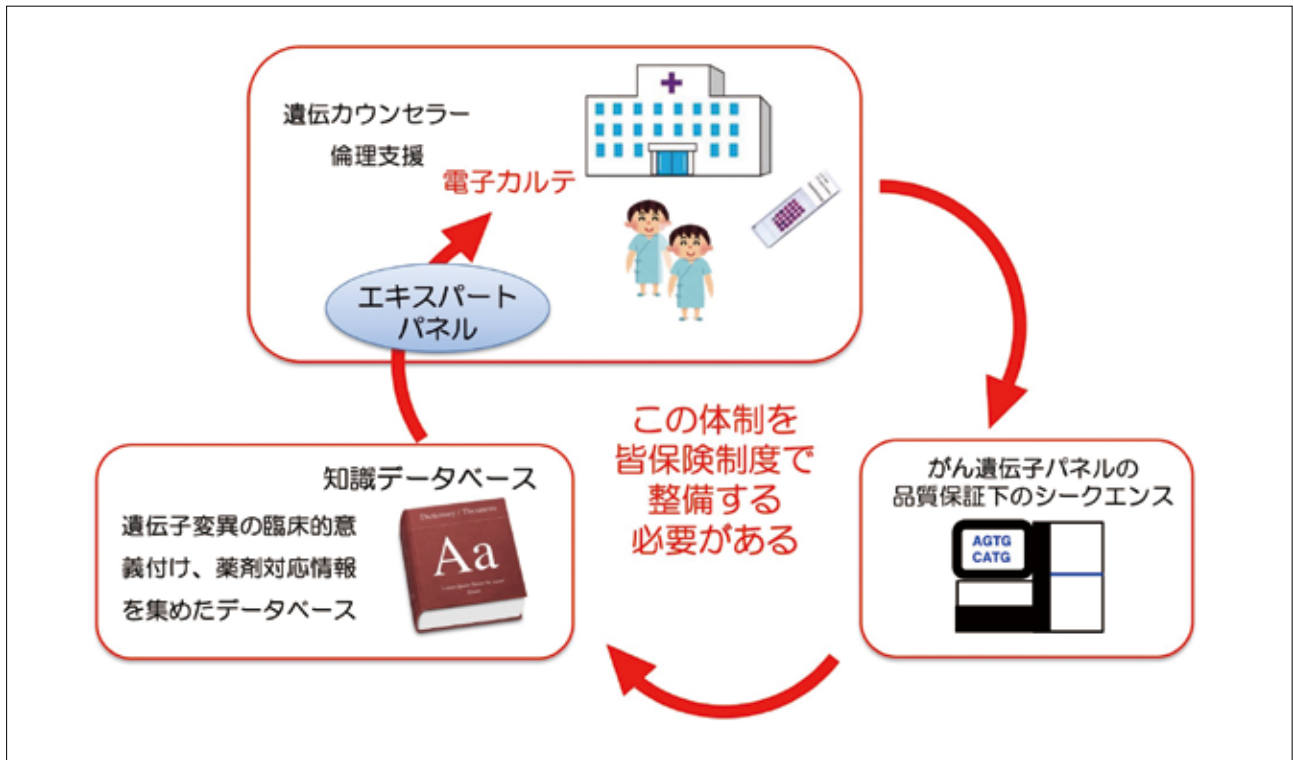


図1 がんゲノム医療のための社会基盤

要になります。さらに、こうして得られた患者毎の検査レポートは病院の多職種からなるエキスパートパネルにかけられて患者の治療方針を決定することになります。

日本においては、がんゲノム医療推進コンソーシアム懇談会の提言を受けて、令和2年3月現在で、11カ所のがんゲノム医療中核拠点病院、34カ所のがんゲノム医療拠点病院、さらに162カ所のがんゲノム医療連携病院が選ばれています。また、がん遺伝子パネル検査を行った患者のゲノム情報と臨床情報を集約・利活用するための「がんゲノム情報管理センター」(Center for Cancer Genomics and Advanced Therapeutics: C-CAT)も平成30年6月に設立されました。これらを受けて、いよいよ令和元年6月から、2種類のがん遺伝子パネル検査が保険収載され、皆

保険下のがんゲノム医療がスタートしたのです。

保険診療下のがんゲノム医療体制を図2に示します。患者ががんゲノム医療中核拠点病院/がんゲノム医療拠点病院/がんゲノム医療連携病院のいずれかを受診してがん遺伝子パネル検査を受けるとなると、患者検体が検査会社に送られて解析され、そのレポートが各病院に返却されます。一方、患者の同意の上で、ゲノム情報は検査会社から、臨床情報は各病院からC-CATに送付されます。したがってC-CATのがんゲノム情報レポジトリデータベースには、がん遺伝子パネル検査で得られる配列情報と臨床情報が紐付いた形で蓄えられます。C-CATは、遺伝子変異と対応する臨床試験を網羅する知識データベースを作成し、それをを用いて患者毎の遺伝子変異リストの臨床的意義付けをまとめた「C-CAT

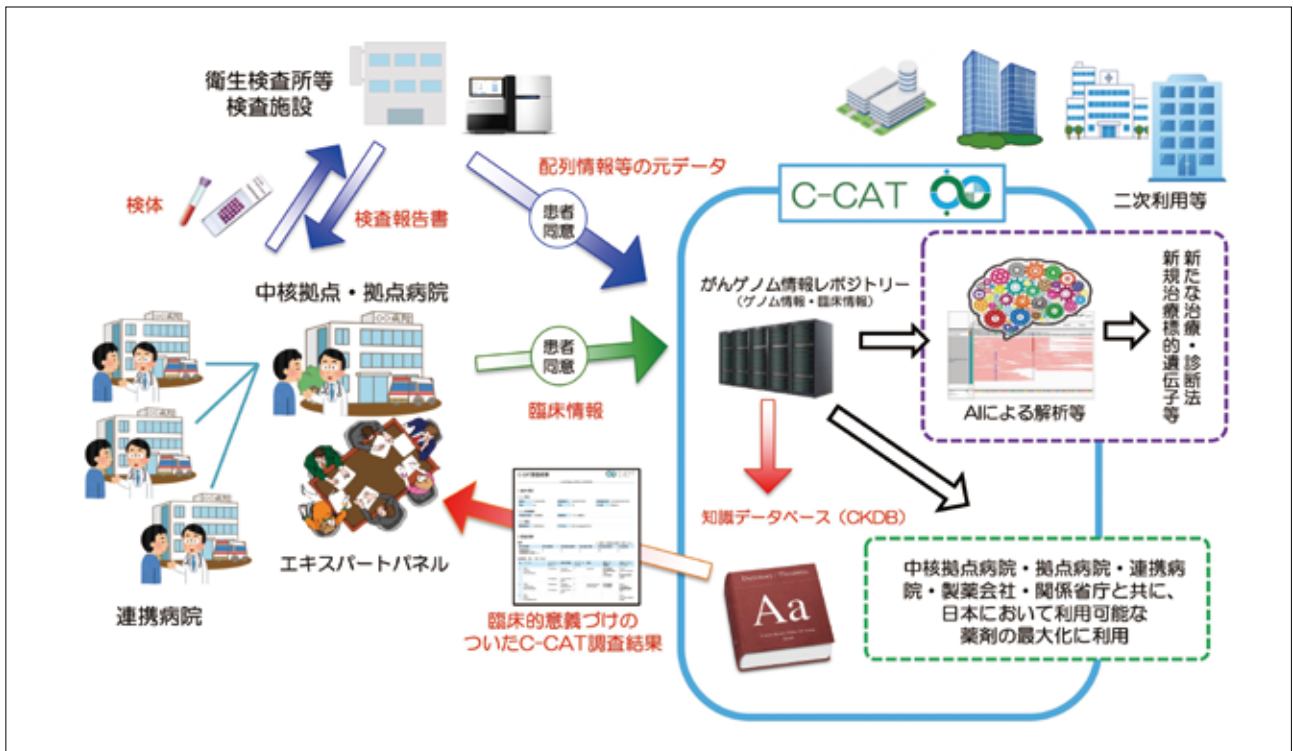


図2 日本におけるがんゲノム医療体制（平成30年6月1日がんゲノム情報管理センター記者発表会資料より改変）

調査結果」を作成して、病院のエキスパートパネル参考資料として送付します。いっぽう、がんゲノム医療を行う病院とC-CATのネットワークによって、承認された抗がん剤の適応外使用などの、日本における抗がん剤の到達を促進する新しい試みがなされています。さらにはC-CATに集約されるデータのアカデミア・企業における利活用の仕組みも作られる予定です。

この日本の体制は、がん治療の最適化につながるだけでなく、日本のがん医療全体の向上にも役立ちます。日本は、米国と比べると使用できる抗がん剤の数に限りがあります。しかし、がん遺伝子パネル検査に基づく新しい適応拡大の枠組みだけでなく、C-CATに集まるデータに基づく臨床試験・治験の立案が加速すると予想され、さらにはC-CATデータは、製薬会社がア

ジア地域を対象とした臨床試験を行う際、日本を対象国として選ぶ大きな理由となるでしょう。このようにゲノム医療は日本のがん医療を大きく変えると予想されます。

令和2年度シンポジウムに向けて

令和元年度の国際がん研究シンポジウムは残念ながら中止となりましたが、がんゲノム医療は、現在のがん医療にとって最大のトピックと言って差し支えないと思います。この、国家レベルの医療ビッグデータを用いてどのような新しい医療が可能になるのか、また海外の情勢はどうなっているのか、などを議論する有意義な令和初めての国際がん研究シンポジウムを新たに企画したいと思いますので、どうぞふるってご参加ください。

事務局より

2019年度国際がん研究シンポジウム「がんゲノム医療の現状と未来」は、新型コロナウイルス感染拡大防止の判断により、残念ながら中止させていただきました。

組織委員長である間野先生をはじめ、開催に向けてご準備をいただいておりますご講演予定の皆様には厚く御礼申し上げます。

間野先生には引き続き2020年度シンポジウムに向けてご一考いただいておりますので、ご期待下さい！

(参考資料：2019年度国際がん研究シンポジウム「がんゲノム医療の現状と未来」プログラム)

2019年度国際がん研究シンポジウム

がんゲノム医療の 現状と未来

2020.3/26(木)・27(金)

国立がん研究センター研究棟
1F大会議室 (東京都中央区築地)

- ・参加費無料
- ・事前申込制 (裏面よりお申込み下さい)
- ・講演は英語のみ。同時通訳なし。

2020.3/26 (木) 【1日目】 13:00-16:45

Session 1 Cancer Genomic Medicine in Japan 座長：土原一哉 (国立がん研究センター先端医療開発センター)

- ・河野隆志 (国立がん研究センター研究所) 「遺伝子パネル検査と意義不明変異への挑戦」
- ・織田克利 (東京大学大学院) 「東大オンコパネルの先進医療Bの経験と今後の展望」
- ・池田貞勝 (東京医科歯科大学医学部附属病院) 「がん遺伝子パネル検査の臨床応用」

Session 2 New Sequencing Platform 座長：河野隆志 (国立がん研究センター研究所)

- ・市村幸一 (国立がん研究センター研究所) 「小児固形がんの分子診断・リスク分類を目的としたゲノム・エピゲノム検査の開発」
- ・片岡圭亮 (国立がん研究センター研究所) 「造血器腫瘍における臨床シーケンスと問題点」
- ・西原広史 (慶応義塾大学) 「がんゲノム医療における全エクソン解析の臨床実装」

2020.3/27 (金) 【2日目】 10:00-15:30

Session 3 Implementation of Precision Medicine 座長：西原広史 (慶応義塾大学)

- ・遠山仁啓 (アマゾンウェブサービスジャパン (株)) 「クラウドがもたらす新時代の医療」
- ・谷嶋成樹 (三菱スペース・ソフトウェア (株)) 「リアルワールドエビデンスを取り込むがんゲノム知識データベースの開発」
- ・中村清吾 (昭和大学) 「我が国におけるHBOC診療の現状と将来展望」
- ・野村尚吾 (国立がん研究センター研究支援センター) 「Hybrid/Synthetic対照群としてのがんゲノム“Real World”データの利活用」

Session 4 Real World Evidence for Precision Medicine 座長：間野博行 (国立がん研究センター)

- ・Dr. Woong-Yang Park (Samsung Genome Institute/ Samsung Medical Center, Korea) 「統合された臨床ゲノムデータベースを用いた生殖細胞変異と癌治療反応との関連」
- ・Dr. Tony Loeser (Syapse Inc., USA) 「米国におけるリアルワールドデータの展望と活用の展開」
- ・松本慎吾 (国立がん研究センター東病院) 「LC-SCRUM-Japan/Asiaの成果と挑戦」

2019年度 がんサバイバーシップ研究成果発表会 開催報告



跡見学園女子大学マネジメント学部
教授 石塚 正敏
(がんサバイバーシップ研究成果発表会評価委員長)

令和2年2月6日(木)に国立がん研究センター
研究棟セミナールームにおいて2019年度がんサ
バイバーシップ研究成果発表会・セミナーが開
催されました。

今年度の参加者は100余名と人数的には若干
小規模ではありましたが、東北から四国まで各
地の医療従事者やがん経験者ご本人、患者会関
係者、企業関係者、行政関係者など、その背景
は多岐にわたり、皆さんとても熱心にペンを走
らせていらっしゃいました。

本稿では「第1部 がんサバイバーシップ研

究成果発表会」について報告します。

発表会は評価委員会を兼ねておりましたが、
がんサバイバーシップに関連する様々な問題に
ついて多くの方々と認識を共有したいとの考え
から毎回一般の方々にも公開し、研究成果発表
会として開催しています。

平成30年度にがんサバイバーシップ研究助成
を行った10課題(10名)の研究成果発表要旨は
次のとおりです。

【研究成果発表要旨】(発表順)

1. 平山 貴敏 (国立がん研究センター中央病院 精神腫瘍科)



「AYA世代のがん患者の交流サロン『AYAひろば』の開発」

我々は、国立がん研究センター中央病院患者サポートセンターで月1回
AYA世代のがん患者同士の交流サロン『AYAひろば』を開催している。
2016年5月から2019年8月までの計36回の開催に参加した延べ150名の患
者に、アンケート調査を行った。その結果、内容と有用度に関して「とて

も良かった」「とても役立った」がそれぞれ最多であった。

また、参加者にとって「同世代との交流」「気分転換」「情報の獲得」の3つの観点で有益であることが明らかになった。

院内のAYA世代のがん患者のピアサポートのモデルを目指して研究開発を進める。

2. 全田 貞幹 (国立がん研究センター東病院 放射線治療科)



「頭頸部がんで化学放射線治療 (CRT) を受けた患者の晩期有害事象 (嚥下障害) に関する適正な follow-up 方法の確立に関する研究」

近年、頭頸部癌に対する放射線治療後の晩期有害事象として嚥下障害とそれに伴う誤嚥性肺炎が社会的問題となっている。本研究では当院で根治的放射線治療を受けた頭頸部癌患者における誤嚥性肺炎の発生実態を遡及的に調査した。

誤嚥性肺炎は21例 (28%) と予想以上に観察され、照射開始から発症までの期間中央値は12.9ヶ月 (1.2-63.6ヶ月)、16例 (76%) が照射開始後3年以内に発症していた。誤嚥Grade3以上は14例 (18%)、肺炎が直接原因の死亡は2例であった。観察期間中央値61.6ヶ月 (3.5-72.6ヶ月) で5年全生存割合65.5% (95% CI: 53.0-75.4%) であった。

本疾患群は生存成績においても治療後3年以内の観察が重要であることから、通常の外来間隔は変更せず検査項目に肺CT等誤嚥性肺炎のための画像検査を加えることで、特別に外来日を設けなくても誤嚥性肺炎の早期発見は可能になるだろうと予測された。

3. 大久保 亮 (国立精神・神経医療研究センタートランスレーショナル・メディカルセンター 情報管理解析部)



「必須脂肪酸・腸内細菌叢バランスとがん再発恐怖の関連:探索的横断研究」

がん再発不安は、がんサバイバーの大きな満たされないニーズの一つであり、副作用がなく普及が容易な、食・栄養で軽減できないかと考えました。一歩目の研究として、がん再発不安とがんサバイバーの栄養状態 (必須脂肪酸と腸内細菌叢) の関連を見る観察研究を行ったのが本研究です。本研究によってがん再発不安と栄養状態の関連が示唆されたことから、栄養状態を改善することで、がん再発不安が軽減できないか、現在介入研究を企画しています。

4. 石井 瞬 (道ノ尾みやた整形外科)



「外来リンパ浮腫患者に対する運動療法支援ネットワークの構築」

本研究では、リンパ浮腫患者に対する運動療法が実施できていない原因を明らかにするために、全国のリンパ浮腫外来に対してアンケート調査を実施した。

スタッフや診療時間の不足、施設・設備の不十分さなどの原因で、運動療法を実施している施設は14.3%と少数であった。

その問題点を解決するために、がん連携拠点病院のリンパ浮腫外来と連携して、整形外科クリニックで専門の理学療法士による運動療法を実施するネットワークを構築した。

症例数はまだ少ないが、四肢周径や関節可動域の改善といった効果を認めている。

今後は全国的にネットワークの普及を啓蒙していきたい。

5. 松井 基浩 (東京都立小児総合医療センター 血液・腫瘍科)



「AYA世代がん患者の心理社会的困難及び成長に関する調査研究 1年後コホート研究」

日本でのAYA世代がん患者の心理社会的困難及び成長に関しての全国調査は少なく、一昨年に全国調査を行った以下の3分野に関して、経時的な変化を追うため、1年後のコホート研究を実施した。

① AYA世代がん患者の就学、就労 ② 恋愛、結婚 ③ 精神・心理的問題

精神・心理的問題ではPost traumatic growthの増加に同年代のがんの友人がいることが関与している可能性を示し、AYA世代におけるピアサポートの重要性を示す結果となった。

今後他の分野の解析結果も学会、論文報告を行っていく。

6. 貞廣 良一 (国立がん研究センター中央病院 精神腫瘍科)



「多目的コホート研究におけるがん生存者の認知機能障害に対する予防対策解明のための分析疫学的研究」

認知症の危険因子の解明に注目が集まっているが、がん罹患および糖尿病とがんの合併による認知症リスクは明らかになっていない。本研究は、多目的コホート研究 (JPHC Study) の付随研究として、中年期からの約24

年間のがん及び糖尿病に罹患した者としなかった者の認知症及び軽度認知障害のリスクを比較した。結果、がんと糖尿病の両方に罹患した者は、両方共に罹患しなかった者に比べ、軽度認知障害および認知症リスクが高く、そのメカニズムにはインスリン抵抗性が関与している可能性が考えられた。

7. 松井 豊（筑波大学 人間系）



「がん及びがん体験者への偏見に対する研修プログラム作成の試み ーがんと恋愛・結婚に着目してー」

2017年度がんサバイバーシップ研究助成金研究「若年がん体験者のがん罹患が恋愛及び結婚に及ぼす影響」で、一般集団に、がんやがん体験者に対する否定的な態度がみられた結果を受け、恋愛・結婚に着目して、がんやがん体験者への偏見の軽減を目的としたがん教育プログラムの開発を試みた。その結果、がん体験者との交際への迷いが減少し、がん＝死のイメージが低減するなどの教育効果がみられた。

プログラムでがんの正しい知識を得て、がん体験者の体験談を聞いたことで、がん体験者の気持ちを踏まえた考え方に変容したと考えられた。

8. 中谷 有希（国立国際医療研究センター国府台病院 心療内科）



「AYA世代のがん患者に向けた療養支援Webサイトの有用性に関する探索的研究」

AYA世代のがん経験者に対する支援リソースとして、多様なコンテンツを含む療養情報と体験談からなるWebサイトの構築を行い、サイト内に設置した評価アンケートを行った。その結果、本サイトを閲覧した患者・家族・医療者にとって、概ね有用であるという肯定的な評価が得られた。

一方、課題としては、情報コンテンツおよび体験談の拡充や、ユーザーのニーズを踏まえたサイト構成の改善が必要であることが明らかになった。今後も引き続き検証を行い、この世代のがん経験者の支援へと繋がるためのよりよいサイトにしていく必要があると考えられる。

9. 小山 美樹 (東京女子医科大学病院 看護部)



「外来で経口抗がん剤治療を受ける脆弱な高齢がん患者のQOL維持・向上にむけた患者教育」

がん患者全体の約7割が高齢者であり、抗がん剤治療を受ける高齢者への支援体制の確立は喫緊の課題である。そこで、既存のエビデンスを活用したA大学病院での実装研究を計画した。

助成期間中の成果として、2つの予備調査から組織の文脈に合致した介入プロトコールを作成した。プロトコールは、脆弱性のスクリーニング (G8)、ヘルスリテラシーに着目した患者教育、多職種連携がパッケージ化されている。

今後は、非介入群と介入群の2群で副作用に関する知識と副作用の発生割合を比較し、実臨床での効果を検証すると同時にプロトコールの現場適用を促す実装戦略を明らかにしていく。

10. 李 慶姫 (東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科)



「歯科診療所におけるがん患者の不安に関する調査と歯科診療所向けリーフレットの開発」

歯科診療所の多くは半個室状態である。このことががん患者にとってがんに罹患したことを話しにくい環境であるかを探るため、がん患者を対象にアンケート調査を行った。得られた回答 (n=500) を解析した結果「かかりつけの歯科医師にがんに罹患したことを話した」に関連する因子として「がん主治医に話すように言われた」が強い動機となることが示唆された。引き続き解析を進め、がん医科歯科連携に寄与できる有用な資料を報告したい。

近年、がんの療養とこれに続く人生において直面する様々な課題について、患者自身と患者を取り巻く周囲の方々が手を携えて乗り越えていこうとする“サバイバーシップ”の充実を大切にしたいという動きが広く普及してきました。平成26年度から始まった「がん研究10か年戦略」には、研究テーマの一つとして「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築をめざ

した研究」が位置づけられ、平成29年度からの第3期がん対策推進基本計画には「がん患者等の就労を含めた社会的な問題 (がんサバイバーシップ支援)」が掲げられたことが大きな推進力となっています。

がん研究振興財団では、こうした動きをいち早く捉えて平成27年度から「がんサバイバーシップ研究支援事業」を開始して毎年多くの研

究テーマの応募を得てきましたが、本稿では第4年次目にあたる平成30年度に採択された研究の成果をご紹介します。

これまでの研究成果として、患者団体やNPO活動の活性化が図られたほか、がんサバイバーの食生活を支える簡便なレシピ集の発刊に結びつく等、様々な成果物が得られております。

今年度の研究成果発表では、再発不安や合併・後遺症の予防対策から情報提供・患者交流方策、偏見防止策に至るまで幅広い分野にまたがる多様な研究内容が報告されました。この中から、今後がんサバイバーの皆さんに有用な知見、成果物が誕生することを切に願っております。

2019年度 がんサバイバーシップセミナー開催報告

「ケア提供者としてがんサバイバーを支えるということ」



京都大学大学院医学研究科 教授 / がん看護専門看護師
ともいき京都 代表
田村 恵子

1. がんサバイバーシップとエンパワーメント

がんサバイバーとは1986年にアメリカで誕生した概念である。全米がんサバイバーシップ連合（National Coalition for Cancer Survivorship: NCCS）は、「がんサバイバーとはがんの診断を受けた全ての人であり、癌の診断を受けた人はその人が生涯を全うするまでガンサバイバーであり、再発するかしないか治ったか治らないかは関係しない」と定義している。さらに、Clarkは「がんと共生し克服し、それと共に生き抜いていくという経験であり、生きるためのプロセスである」（Clark, 1996）とも定義している。

がんサバイバーの基盤となる考えは、1950年代から60年代に生じたアフリカ系アメリカ人の公民権運動家や1970年代のフェミニズム運動など、被抑圧者の社会変革運動であるエンパワーメントである。エンパワーメントとは、

「偏見対象となる集団のメンバーが否定的な評価を受け、パワーを喪った状態から回復することを目指し、当事者やその環境に対する活動にソーシャルワーカーが関わっていく過程である」（Solomon, 1976）と提示されている。エンパワーメントに基づくアプローチの目的は、「自分自身では何も変化を生み出すことができない「無力感」、自分を取り巻く環境に習得するしかない無力さ、あるいは自分を取り巻く環境を自分の力では何もコントロールできない無力さを感じている人に対して無力感を克服し、パワーの回復もしくは獲得を目指すものである。」（小田ら、1999）。具体的には、①カウンセリング、②相互支持、③アドボカシー、④ソーシャルアクションの4次元に分かれ、個人的次元から社会的次元までの一連のプロセスである。

この中でも、特に、セルフアドボカシーとは、がんという病を抱えた人が困難な状況の中にあっても自己のコントロール感を取り戻し、がんと正面から向き合い行動する姿勢や力のこと

であり、がんサバイバーの内なる力であると言える。すなわち、がんサバイバーを弱者としてではなく、自己の意志を持ちそれを主張する力を持つ者として捉える視点が重要であり、がんサバイバーシップ・ケアによりがんサバイバーはエンパワーメントすることができる。

2. がんサバイバーシップの軌跡

2013年4月には、国立がん研究センターに「がんサバイバーシップ支援研究部」が設立された。2012年6月に厚生労働省が施行した「第2期がん対策推進基本計画」においては“がんになっても安心して暮らせる社会の構築”を目標として、がん経験者の就労問題も含めた社会的な課題が挙げられるようになった。がんと診断された人の5年相対生存率は、2009年から2011年では男女計で64.1%（男性62.0%、女性66.9%）であり徐々に向上している。

がんサバイバーシップは、大きく4つの時期に分けられる。すなわち、がんと診断され最初の治療が完了するまでの期間である急性期の生存の時期（Acute Survival Stage）、治療効果がみられ一区切りした時点から延長された生存の時期へと移行する時期（Extended Survival Stage）、治療が終了して慢性期へと移行した安定した変化のない期間（Permanent Survival Stage）、そして死の直前までのがんとともに生きる時期（Final Survival Stage:dying）である。このプロセスにおいて最も注目したいことは、がんサバイバーは新しい普通に慣れていくというよりも、むしろその人が持っている機能をそれまでよりもっと高めることができると考えられていることである。現代社会において、が

んサバイバーは医療者が支える存在であると同時に、他のがんサバイバーや医療者をも支える存在であると言える。

3. がんサバイバーシップ・ケアとその実際

がんサバイバーシップ・ケアについてのASCOガイドラインでは、4つの要素を提示している。（ASCO, 2014）（図1）①新規がんと再発がんの予防・発見、②再発・新規原発がんの観察、③がんおよびがん治療の長期的影響・遅発性効果に対する治療介入、④サバイバーのすべてのニーズの充足を実現する専門家とかかりつけ医との連携、である。さらに質の高いサバイバーシップ・ケアとして、①再発がないか経過観察、②心理社会的・医療的な遅発性効果の

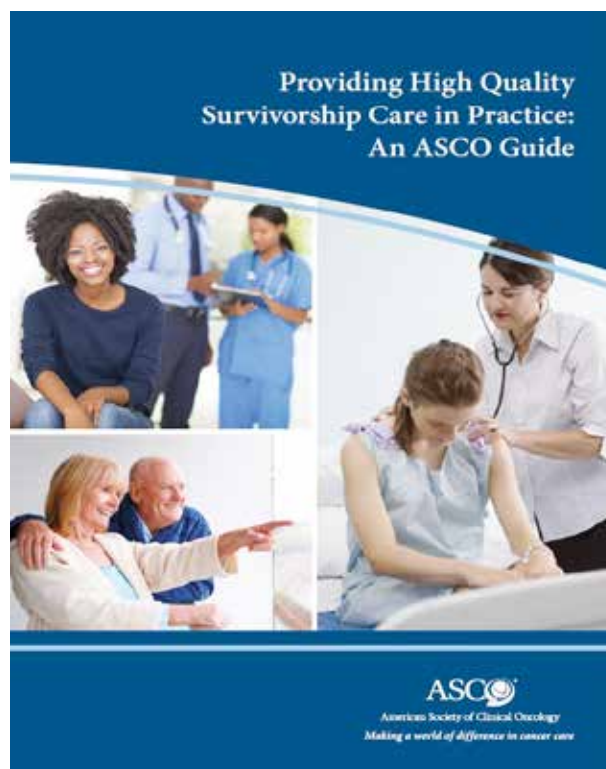


図1. Providing High Quality Survivorship Care in Practice: An ASCO Guide


表1. 「ともいき京都」活動

- 2015年7月10日より活動開始
- 開催日：
第2・第4金曜日
14:30～20:00
- 会場：
コミュニティスペース
「風伝館」




表2. 「ともいき京都」ミッション

重層的な市民文化を育んできた京都で、
がんを体験した人が、
生きる力を発揮して知恵を育み、
周りのいのちと共に生き、
支え合うネットワークづくりを目指します



モニタリングおよび管理、③二次がんのスクリーニングを推奨、④診断、治療、遅発性効果および長期的影響の可能性に関する保健教育をサバイバーに提供、⑤適応があれば、専門家や支援資源に紹介、⑥家族性遺伝的リスクの評価(必要に応じて)、⑦食事、運動、健康増進活動に関する指導、⑧経済や保険に関する問題を援助する支援資源の提供、⑨サバイバーが自らの医療ニーズを主張するためのエンパワー、を挙げている。わが国におけるがんサバイバーシップ・ケアは、従来の「患者会」から「がん患者サロン」として発展してきた。そして、現在、「がん患者サロン」は利用者のニーズに合った多様なスタイルで広がっている。

我々は、2015年7月より京都市でがん患者・家族、市民、専門職が共に支えあって生きることができるとして「ともいき京都」を開催している。(表1、表2)「ともいき京都」

表3. がんサバイバー、市民、専門職の新たな相互支援：ケアリング・コミュニティ

	セルフヘルプ・グループ	ケアリング・コミュニティ	サポートグループ
中心となる企画・運営	当事者(患者・家族)		医療従事者
活動の構造化度	低い：活動内容は各グループで様々		高い：プログラムの進行がほぼ決定している
主な活動場所	病院から独立した地域の施設など		病院内
活動内容	講演、会員同士の情報交換、体験発表、親睦旅行、会報発行など		教育的アプローチ、体験的アプローチ、気持ちの共有アプローチを組み合わせ合わせたプログラムの提供
参加者とグループ関係	メンバー同士対等な立場で協力し合う関係		専門家(医療従事者)と素人(当事者)というタテの関係

【参照】がん患者と家族のサポートプログラム
- 「がんを知って歩む会」の基本と実践- p.17 より作成、一部変更

では、専門家が一方的に支えるのではなく、相互に支えあう新しい形としてケアリング・コミュニティの創成を目指している。(表3) その基盤は自分が興味・関心あることに問いを持ち、その問いを考えて、考えたことを言葉にして話し、他の人の意見を聞くことである哲学対話にある。すなわち、対話とは合意や問題解決のための話し合いではなく、他者と共に考え探求することが目的であり、そのプロセスにおいて、①自分自身が語りたくないこと、考えたくないことを自分のペースで語ることができる、②他者を「深く理解」し「認め受け入れる」ことができる、③自分自身についてもよく知ることができる、④多様な関わり方が認められ、人として出会うことができる。その結果として、それぞれが生きる力と知恵を育むことである。5年弱の「ともいき京都」の活動を通して、がんサバイバー、市民、専門職の対話の場から生きる知恵を生み出すケアリング・コミュニティは徐々に創成されつつある。また、ケアリング・コミュニティはがんサバイバーの社会との共生について多面

的に対応できる力を備えており、さらに超高齢化社会及び人口減少や2040年を展望した、全世代型の社会構築の基盤となりうる可能性があると考えている。なお、ともいき京都の具体的な活動については、ともいき京都HP <http://tomoiki-kyoto.net/> を参照されたい。


4. まとめ

がんサバイバーシップとそのケアについて、我々の取り組みも含めて紹介した。最後に今後の課題について紹介しまとめとする。今後の課題として、がんサバイバーの現状で満たされていないニーズにどのようにアプローチしていくかが重要であると考え。具体的には、まずがんサバイバーと医療専門職との協働関係をどのように紡いでいくのかということがある。協働関係を構築するには、医療専門職のがんサバイバーシップに関する教育を体系的に行う必要がある。次に、がんは慢性疾患であるとの視点からのアプローチを充実していくことがある。初期治療が終了したら考えるのではなく、がん診

断時から個々の患者に対するサバイバーシップ・ケア計画を提示し、それに基づく長期フォローアップ体制を確立することである。現代のサバイバーシップは“Joint Venture”であることを念頭において、共にサバイバーシップ・ケアの充実を図っていきたい。



当日の様子



2019年度 事業実績

- 1. がん研究助成審議会報告 …………… 24
委員長 垣添 忠生
- 2. 海外派遣研究助成委員会報告 ……… 33
委員長 関谷 剛男
- 3. 看護師・薬剤師・技師等
海外研修選考委員会報告 …………… 40
委員長 桑原 節子
- 4. HOPE事業等運営委員会報告 ……… 44
委員長 上田 龍三
- 5. がんサバイバーシップ
研究支援事業運営委員会報告 ……… 47
委員長 石塚 正敏

がん研究助成審議会報告

委員長

垣添 忠生（公益財団法人日本対がん協会 会長）

がん研究振興財団の、第52回研究助成審議会の概略を御報告する。

本研究助成は、がん研究振興財団に寄せられた一般の方々、特にがん治療を受けられた方々、あるいは亡くなった方の御遺族からの御寄附を原資としている。

その意味で、国の各種研究助成金や、各種財団の研究助成金とは一線を画する。審査に当る委員全員も、この点を強く頭に置いて作業に臨んだ。

審議会は令和2年1月22日(水) 10:30～12:00、がん研究振興財団会議室で開かれた。

委員5名は以下の諸氏で、

垣添忠生（委員長）、上田龍三、坂本亨宇、関谷剛男、山口俊晴、（敬称略）、全員御出席いただいた。

財団事務局からは堀田理事長、雨宮事務局長、石川総務部長の3名が参加した。

堀田理事長による開会挨拶の後に議事に入った。前回議事録要旨について、特に問題なし、ということとその確定を行った。

(1) 委員長の互選

事務局長から「がん研究助成審議会規則、第4条」により委員長の互選について説明があり、垣添委員が委員長に互選された。

(2) 2019年度（第52回）がん研究助成について

研究助成金A課題は、わが国でがん研究に従事している日本人研究者の個人またはグループが対象で、一課題100万円。A課題には119件の応募があった。A課題の助成予定は20件であるが、各委員による事前評価を踏まえて、個別に審査した結果、20件を確定した。（よって、次ページの通り20名が採択された）

B課題は看護師、技師（放射線・検査）、管理栄養士、放射線医学物理士、臨床心理士等を対象とし、一課題50万円。本年は23件の申請があり、各委員による事前評価を元に個別に全員で審議した結果、10件が確定された。（以上により、次ページの通り10名が採択された）

応募について

○次年度の応募要領については、事前に各委員に諮問のうえ実施することとするが、全体的な表現は本年度の内容を踏襲する。

その他

(2020年度用応募要領について)

○次年度の応募要領については、事前に各委員に諮問のうえ実施することとするが、全体的な表現は本年度の内容を踏襲する。

○研究助成金の助成金額及び助成件数について

- ・ A課題については、申請数が多く採択率が低い状況となっていること、
- ・ B課題は、申請数が少なく採択率が高い状況となっていること、に鑑みて、B課題の執行予算額（500

万円)の一部をA課題に振り分けることとし、2020年度のがん研究助成金は

- ① A課題 1課題 80～100万円 採択件数は 2,250万円の範囲内
- ② B課題 1課題 50万円 採択件数は 5件程度

とし、応募要領に申請額を査定する場合もあり得る旨を記載すること等について審議会として了承した。

なお、B課題申請状況について職種別に申請割合を分析し申請件数を増やす等の努力も必要ではないかとの意見もあった。

2019年度がん研究助成金受賞者

[A課題]

	氏名	所属機関	研究課題名
1	平山 順	公立小松大学	癌を誘発するストレスシグナルが体内時計を破綻に導く分子機構
2	石本 崇胤	熊本大学	腫瘍間質由来エクソソームによる抗がん剤抵抗性獲得メカニズムの解明
3	西川 恵三	大阪大学	エピゲノム創薬にもとづくがんの骨転移抑制薬の開発
4	宮居 弘輔	防衛医科大学校	前立腺癌診断における multi-parametric MRI 偽陽性・偽陰性例の病理学的・形態計測的検討による正診率の向上
5	玉井 恵一	宮城県立がんセンター研究所	胆管癌における、静止期がん幹細胞に誘導する分子機構の解明
6	大本 晃弘	がん研究会有明病院	頭頸部原発神経内分泌がんの臨床病理学的特徴とその遺伝学的背景に関する研究
7	永田 安伸	日本医科大学	骨髄異形成症候群 (MDS) から白血病発症に至るまでのクローン進化機序の解明
8	園下 将大	北海道大学遺伝子病制御研究所	遺伝子変異の多様性が膵臓がん形質に及ぼす影響の解明と新規膵臓がん治療法の開発
9	富樫 庸介	千葉県がんセンター研究所	HLA class I /class II とがん免疫療法の効果と耐性への影響の解明と新たな治療開発
10	山口 知也	熊本大学大学院	肺がんにおける腫瘍内不均一性を示す癌胎児性抗原としての ROR1 発現細胞の役割
11	荻原 秀明	国立がん研究センター研究所	ARID1A 欠損型卵巣明細胞がんにおける個別化治療法の開発
12	井田 智	がん研有明病院	胃癌手術後の詳細な血糖値変動の実態把握と、個別化栄養介入によるダンピング症候群の克服
13	西川 義浩	京都大学大学院	膵癌の維持・進展において Hes1 が果たす役割の解明
14	谷口 博昭	慶應義塾大学	革新的エピトープ探索法によるがん幹細胞性分子特異的な重鎖抗体作出とコンパニオン診断法の確立
15	村上 優子	東京工科大学	合成致死表現型を利用した LATS2 変異がんに対する新規治療標的の探索と機能解析
16	早河 翼	東京大学医学部附属病院	TGF 経路依存性浸潤型胃癌の線維化・血管新生メカニズムの解析と治療応用
17	今村 裕	がん研有明病院	上部消化管腺癌における MSI-low に着目した網羅的免疫・ゲノム解析による新規免疫治療創出
18	井上 聡	国立がん研究センター研究所	イソクエン酸脱水素酵素 (IDH) 変異がんにおける DNA 修復異常を標的とした新規治療法の開発
19	山本 雄介	国立がん研究センター研究所	Hippo 経路阻害剤による Kras 変異型肺がんへの治療法の最適化
20	佐々木由香	長崎大学大学院	肺がん細胞におけるポリ (ADP- リボース) 分解酵素 (PARG) と DUSP22 機能阻害条件下における合成致死誘導メカニズムの解析

[B 課題]

	氏名	所属機関	研究課題名
1	河添 仁	慶應義塾大学	ニボルマブ及びペムブロリズマブの有効性に影響を及ぼす併用薬と腸内細菌叢の臨床及び基礎研究
2	原田 耕平	札幌医科大学付属病院	年齢・性別を考慮した新しい標準肝容積算出における研究
3	島田 直毅	(公財)がん研究会 有明病院	がん FDG - PET の標準化に向けたファントムデータベースの構築と画像評価手法の確立
4	真川 明将	名古屋市立大学病院	抗がん剤の腎障害における腎老化細胞の役割に関する基礎的研究
5	岡田 直人	徳島大学病院	臨床データと医療ビッグデータの融合による多層的データマイニング手法を基盤とした免疫チェックポイント阻害薬による致死的免疫関連有害事象の発現リスク評価法の構築
6	渋谷 周平	東海大学医学部付属病院	脳血流及び脳温度評価を用いた脳腫瘍放射線治療における脳壊死画像診断
7	近藤 勝弘	名古屋市立大学大学院	腫瘍崩壊症候群リスクの個別化における「尿酸トランスポーター遺伝子解析」の有用性
8	平田 勝啓	京都大学医学部附属病院	新規免疫染色法を利用した病理診断の迅速化と精度向上に関する研究
9	松金 良祐	九州大学病院	日常診療情報の活用および患者遺伝子解析による免疫チェックポイント阻害薬の有害事象リスク因子の探索
10	橋本理恵子	大分大学	A Y A 世代がん患者を支える看護相談における援助モデルの開発

A課題 (20名)

平山 順

● 公立小松大学 保健医療学部 臨床工学科 時間生物学 教授



研究課題名

癌を誘発するストレスシグナルが体内時計を破綻に導く分子機構

研究内容

体内時計は、多様な生理機能に観察される約24時間の周期変動を作り出す生体の恒常性維持機構である。これまでに、癌を誘発する放射線や酸化ストレスが体内時計の障害を引き起こすことが明らかにされている。申請者は、ストレス応答性リン酸化酵素カスケードと活性酸素シグナルが体内時計の制御を担うことを報告してきた。本研究では、これらの細胞内シグナル経路の過度な活性化が体内時計に与える影響を理解することで、癌を誘発するストレスシグナルが体内時計を破綻させる分子機構の解明を目指す。

石本 崇胤

● 熊本大学 国際先端医学研究機構 特任准教授



研究課題名

腫瘍間質由来エクソソームによる抗がん剤抵抗性獲得メカニズムの解明

研究内容

スキルス胃癌は腫瘍間質との相互作用が強く、腹膜播種や癌性リンパ管症、骨転移などの切除不能な転移を引き起こしやすい。また、エクソソームは細胞間コミュニケーションに利用されており癌細胞由来のエクソソームが癌進展を引き起こすことが報告されている。本研究では、腫瘍間質に存在する線維芽細胞(Cancer-associated Fibroblasts)由来のエクソソームが胃癌の抗がん剤抵抗性を引き起こす分子メカニズムを明らかにし、腫瘍間質に対する新規治療ターゲットの創出を目指す。

西川 恵三

● 大阪大学 免疫学フロンティア研究センター 特任准教授



研究課題名

エピゲノム創薬にもとづくがんの骨転移抑制薬の開発

研究内容

近年、罹患者数が増加している前立腺がんや乳がんは、骨への転移能が極めて高い。がんの骨転移の進行には、骨吸収を司る破骨細胞とがん細胞との間で、相互に活性を増強し合う悪循環がかかわる。本研究では、エピゲノム創薬によって見出した破骨細胞の阻害効果をもつ化合物を利用することで、がん細胞の骨転移抑制の是非を検証することを目的とする。破骨細胞のエピジェネティック制御を標的とした骨転移治療の有効性を明らかにすることで、がん治療薬開発のための新たな創薬アプローチを提案することを目標に掲げる。

宮居 弘輔

● 防衛医科大学校 臨床検査医学講座 助教



研究課題名

前立腺癌診断におけるmulti-parametric MRI偽陽性・偽陰性例の病理学的・形態計測的検討による正診率の向上

研究内容

前立腺癌診断におけるmulti-parametric MRIの重要性が高まっており、MRI陽性病変への標的生検による診断率向上、及びMRI陰性症例への不必要な生検回避をその主旨としている。しかしMRI陰性の癌(偽陰性例)やMRI陽性の非腫瘍(偽陽性例)が一定数存在し、影と実体の関係であるMRI所見と組織学的所見の比較・検討は、前立腺癌診断アルゴリズムの改善にとって急務である。本研究では、MRI偽陽性・偽陰性例における半自動画像解析を含む組織・形態計測的検討を実施し、前立腺癌の効率的かつ正確な診断アルゴリズムの構築に資するデータを得ることを目的とする。

玉井 恵一

● 宮城県立がんセンター研究所 がん幹細胞研究部



研究課題名

胆管癌における、静止期がん幹細胞に誘導する分子機構の解明

研究内容

胆管癌は、現在においても根治は困難であり、新たな治療手段が望まれている。近年、腫瘍組織のなかには抗腫瘍剤耐性や腫瘍再構築能を持つ静止期癌幹細胞の存在が知られている。私たちは、癌細胞の免疫不全マウスにおける造腫瘍能を指標に癌幹細胞をスクリーニングした結果、胆管癌において、静止期癌幹細胞の維持に必要な分子を同定した。本研究では、静止期癌幹細胞の維持機構を詳細に解析し、あらたな治療標的を見いだすことを目指す。

大本 晃弘

●がん研究会有明病院 総合腫瘍科 医員



研究課題名

頭頸部原発神経内分泌がんの臨床病理学的特徴とその遺伝学的背景に関する研究

研究内容

頭頸部原発神経内分泌がん(NEC)はNECの中でも希少なポピュレーションであり、臨床病理学的特徴および遺伝学的背景は明らかではない。本研究では病理学的にNECと診断された頭頸部原発例を解析し、組織学的亜型、Ki-67 indexといった病理学的指標と、化学療法への反応性、予後との関連につき考察する。加えてがん遺伝子パネルを用いて腫瘍組織のシーケンスを行い、小細胞肺がんで特徴的なTP53やRBIをはじめとする遺伝子変異と共に、druggableな遺伝子異常を有する症例の頻度を明らかにすることを旨とする。

永田 安伸

●日本医科大学 血液内科 特別研究生



研究課題名

骨髄異形成症候群(MDS)から白血病発症に至るまでのクローン進化機序の解明

研究内容

骨髄異形成症候群は血液がんの一種であり、高率に急性骨髄性白血病を発症し予後不良である。腫瘍化に直接かかわるような遺伝子異常が腫瘍細胞に複数個共存しており、同一患者の腫瘍内における不均一性の存在を考慮すると、個々の遺伝子変異の腫瘍発症への役割を同定するのは容易ではない。本研究では、時系列に集積をされた試料を解析することでクローン構造を解明し、経時的にどのように腫瘍化が促進され最終的に白血病に進展するのかを明らかにする。腫瘍発症メカニズムを解明し新たな治療戦略の構築に資することを旨とする。

園下 将大

●北海道大学遺伝子病制御研究所 がん制御学分野 教授



研究課題名

遺伝子変異の多様性が膵臓がん形質に及ぼす影響の解明と新規膵臓がん治療法の開発

研究内容

膵臓がんは、種々のがんの中で特に治療の選択肢が少なく、患者の予後が最も悪い。そこで本計画ではこの問題の解決を目指し、膵臓がんの遺伝的多様性ががん形質に及ぼす影響の解析と、新規膵臓がん組み合わせ療法の開発の2項目を実施する。特に、ショウジョウバエやマウスを使用し、膵臓がんを観察される様々な遺伝子変異の組み合わせを再現した動物モデル群を作出して、遺伝子型に対応した次世代型治療法の開発を個体レベルで推進する。

富樫 庸介

●千葉県がんセンター研究所 部長



研究課題名

HLA class I/class IIとがん免疫療法の効果と耐性への影響の解明と新たな治療開発

研究内容

抗PD-1/PD-L1抗体を代表とするがん免疫療法の有効性が証明されたが、その効果は未だ不十分である。耐性機序の解明が不可欠で、代表的なものとしてHLA class Iの欠損が知られている。一方でHLA class IIの抗腫瘍免疫応答での役割はあまり報告されていないが、申請者はマウスモデルでMHC class Iを欠損させてもMHC class IIが発現していると抗PD-1抗体が有効であることを証明している。そこでHLA class I/class IIとがん免疫療法の効果・耐性の関係性について詳細に実験系で明らかにし、臨床的にも検証することで、新たながん免疫療法や効果予測バイオマーカーの開発を目指す。

山口 知也

●熊本大学大学院 生命科学研究部がん生物学分野 准教授



研究課題名

肺がんにおける腫瘍内不均一性を示す癌胎児性抗原としてのROR1発現細胞の役割

研究内容

ROR1はEGFRからの生存シグナルの維持に必須な肺腺癌細胞の生死を決する受容体型チロシンキナーゼであるが、実際の肺腺癌組織の中で、ROR1陽性細胞がどのような意味合いを持つかは不明である。本研究では、肺腺癌の腫瘍内不均一性、及びがん幹細胞を起点としたがんの進展様式、並びに環境に応じた可塑性を探るべく、特にROR1発現細胞の存在意義を明らかにするため、肺がん組織の*in vitro*モデル化、亜細胞集団の同定及び特徴解析、起点細胞の同定を行い、将来的な新規抗がん剤開発の情報基盤の確立を目指す。

荻原 秀明

● 国立がん研究センター研究所 がん治療学研究分野



研究課題名

ARID1A 欠損型卵巣明細胞がんにおける個別化治療法の開発

研究内容

卵巣明細胞がんは標準治療が効きにくいがんである。卵巣明細胞がんの50%はクロマチン制御因子 ARID1A が欠損している。これまでに ARID1A 欠損型卵巣明細胞がんに対する合成致死標的が我々のグループも含めていくつか同定されてきた。しかし、これらの標的の有望性について同じ実験モデル系で比較検討された報告はない。そこで本研究では卵巣明細胞がん患者由来細胞株モデルを用いて ARID1A 欠損がんに有望な新規治療薬候補の中から、ARID1A 欠損型卵巣明細胞がんに最も有望な新規治療薬を明らかにすることを旨とする。

井田 智

● がん研有明病院 胃外科 医長



研究課題名

胃癌手術後の詳細な血糖値変動の実態把握と、個別化栄養介入によるダンピング症候群の克服

研究内容

胃切除により炭水化物が急速に小腸に流れ込むことで生じるダンピング症候群は、胃切除後の長期的な生活障害や栄養状態の悪化、QOLの低下を招くため克服すべき問題である。近年新たに開発された非侵襲的持続血糖測定器(Continuous Glucose Monitoring; CGM)を用いて胃癌術後の血糖変動の実態を把握する。さらに血糖変動の抑えることに着目したダンピング症候群に対する新たな介入法を開発したい

西川 義浩

● 京都大学大学院 医学研究科 消化器内科学講座 医員



研究課題名

膵癌の維持・進展においてHes1が果たす役割の解明

研究内容

膵癌は本邦における悪性腫瘍死亡原因の第4位を占め、5年生存率は10%に満たない最難治癌の一つである。その予後改善のために、病態解明および新規治療法の開発が求められている。我々は、Notchシグナルの下流分子Hes1が膵前癌病変から膵浸潤癌に至るまで幅広く発現していることに着目し、膵癌形成におけるHes1の役割を解析してきた。その結果、Hes1が膵癌のinitiationに重要な役割を担うことを明らかにした。本研究では形成された膵癌におけるHes1の阻害がその維持や進展に与える効果を解析し、治療標的となり得るかについて検討することを目的とする。

谷口 博昭

● 慶應義塾大学 医学部 特任准教授



研究課題名

革新的エピトープ探索法によるがん幹細胞性分子特異的な重鎖抗体作出とコンパニオン診断法の確立

研究内容

がん幹細胞性を担い、治療抵抗性に関わるPRDM14分子に対する抗がん核酸医薬品、並びに低侵襲診断法を開発してきた。しかしながら、コンパニオン診断用抗体の最適化が未達である。従来の抗体作成法は、種間で重要な抗原構造が保持されることが多く、動物免疫では容易で無い。そこで、網羅的ゲノム情報を基盤に種間保存される抗原構造をインシリコで選定し、それに相当するペプチドを合成、リボソームディスプレイ法により改変型重鎖モノクローナル抗体の作成を行う。最終的にがんの予測診断や治療層別化マーカーの創出に繋げたい。

村上 優子

● 東京工科大学 応用生物学部 教授



研究課題名

合成致死表現型を利用したLATS2変異がんに対する新規治療標的の探索と機能解析

研究内容

LATS2遺伝子は悪性中皮腫をはじめ多くのがんで変異があることが知られているが、がん抑制遺伝子であるためLATS2の活性化を標的とする薬剤の開発は困難である。我々は「合成致死」表現型を用い、LATS2変異を持つ細胞のみを死滅させる新規候補遺伝子を複数得た。本申請では、1) 候補遺伝子の一つに着目し、LATS2変異と合成致死表現型を示す分子基盤を明らかにすること、を主たる目標とすると共に、2) 候補遺伝子およびその下流分子の阻害剤を用いてin vivoでの分子標的薬候補としての有用性の評価を行う。

早河 翼

● 東京大学医学部附属病院 消化器内科 助教



研究課題名

TGF経路依存性浸潤型胃癌の線維化・血管新生メカニズムの解析と治療応用

研究内容

申請者は胃上皮特異的遺伝子改変マウスを用いて浸潤型胃癌を模倣するマウスモデルの樹立を試みた。その結果、CDH1・TGFBR2・p53の遺伝子変異の組み合わせにより、早期に粘膜下浸潤をきたす印環細胞型浸潤性胃癌マウスモデルと、Kras・TGFBR2・p53の組み合わせにより、粘膜下浸潤と肝転移をきたす分化型浸潤性胃癌マウスモデルの樹立に成功した。これらのマウス胃腫瘍の遺伝子発現解析により遺伝子変異特異的な治療標的候補分子を同定し、その進展メカニズムを解明し新規治療法を樹立することを目指す。

今村 裕

● がん研有明病院 消化器外科 医長



研究課題名

上部消化管腺癌におけるMSI-lowに着目した網羅的免疫・ゲノム解析による新規免疫治療創出

研究内容

MSIは、MSI-high、MSI-lowおよびMSSの3つに分類される。このうちMSI-high腫瘍は、PD-1/PD-L1系を介した腫瘍免疫回避機構が重要であり、そのチェックポイント阻害剤の有効である。一方、MSI-lowについてはその特徴は未だ解明されていない。本研究では、いまだ予後不良な疾患である上部消化管腺癌において、MSI-lowを呈する腫瘍の臨床病理・分子生物学的・腫瘍免疫学的特徴を網羅的解析手法で明らかにし、免疫治療の可能性を模索する。

井上 聡

● 国立がん研究センター研究所 細胞情報学分野 特任研究員



研究課題名

イソクエン酸脱水素酵素 (IDH) 変異がんにおけるDNA修復異常を標的とした新規治療法の開発

研究内容

イソクエン酸脱水素酵素遺伝子 (*IDH1/2*) の体細胞変異は、DNAメチル化関連酵素 (TET) やヒストン脱メチル化酵素 (JmJc) を阻害する“エピゲノム関連がん遺伝子変異”であり、造血器腫瘍などにおいて好発する。我々は、変異IDHがATM遺伝子発現抑制により、2本鎖DNA損傷修復能を低下させること、2本鎖DNA損傷薬剤への感受性が亢進することを世界で初めて明らかにした。本研究では、変異IDH細胞にDNA修復異常を標的とした薬剤の同定を目的とする。

山本 雄介

● 国立がん研究センター研究所 主任研究員



研究課題名

Hippo経路阻害剤によるKras変異型肺がんへの治療法の最適化

研究内容

活性型Rasのような低分子GTP結合タンパク質を阻害する抗がん剤の開発が強く望まれている。薬剤ライブラリーを用いたスクリーニングにより、活性型Rasに対して選択的に細胞傷害性を示す薬剤を探索した。これまでに、Hippo経路を阻害する化合物を同定し、Kras変異を有する肺がん細胞に対して有効であることを確認している。本研究目的は、候補化合物の抗腫瘍効果に対する機能解析を実施することである。さらに、既存薬であるチロシinkinナーゼ阻害剤との相加・相乗効果を検証し、既存治療薬との併用による治療効果の最適化を目指す。

佐々木 由香

● 長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科分子標的医学分野 特任研究員



研究課題名

肺がん細胞におけるポリ(ADP-リボース)分解酵素 (PARG) と DUSP22機能阻害条件下における合成致死誘導メカニズムの解析

研究内容

合成致死性抗がん剤は、特定の遺伝子変異を持ったがん細胞に対して特異的に致死を誘導することから、副作用の少ない抗がん剤として期待される。これまでに私たちは、肺がん細胞株におけるポリ(ADP-リボース)分解酵素 (PARG) の機能阻害条件下における新規の合成致死性遺伝子として、*DUSP22*を同定した。本研究では、PARGと*DUSP22*の両者の機能阻害により誘導される合成致死誘導メカニズムを解明し、新規のがん治療戦略の提案に展開することを目指す。

B課題 (10名)

河添 仁

●慶應義塾大学 薬学部 専任講師



研究課題名

ニボルマブ及びペムブロリズマブの有効性に影響を及ぼす併用薬と腸内細菌叢の臨床及び基礎研究

研究内容

免疫チェックポイント阻害薬は、これまでのがん薬物治療のあり方を一変させ、多くの固形がんの標準治療の一つとなっている。近年、免疫チェックポイント阻害薬の有効性に影響を及ぼす併用薬や腸内細菌叢が大きな話題となっている。本研究では、ニボルマブ及びペムブロリズマブの有効性に影響を及ぼす併用薬と腸内細菌叢の関係を臨床及び基礎研究で明らかにする。免疫チェックポイント阻害薬の効果を予測するバイオマーカーは確立されておらず、より多くの患者に最適ながん薬物治療を提供するために非常に重要な研究であると考ええる。

原田 耕平

●札幌医科大学付属病院 放射線部 診療放射線技師



研究課題名

年齢・性別を考慮した新しい標準肝容積算出における研究

研究内容

肝悪性腫瘍に対する肝切除術は恒常的に行われているが、切除可能肝容積は個々の肝予備能によって大きく異なる。一方、標準肝容積においても様々な報告が散見されるが、そのほとんどがBSA(体表面積)をベースにした公式で定義されており、同時にこれらの報告は肝移植を目的としているため若年層のデータが多い。本研究では50歳以上の肝容積を解析することで年齢・性別を考慮した新たな標準肝容積の算出式を策定し、肝悪性腫瘍切除における切除限界容積算出の一助となり得るか検討する。

島田 直毅

●(公財)がん研究会 有明病院 診療放射線技師



研究課題名

がんFDG-PETの標準化に向けたファントムデータベースの構築と画像評価手法の確立

研究内容

¹⁸F-Fluorodeoxyglucose Positron Emission Tomography(FDG-PET)は、がん診療において有用な画像診断となっている。本邦で策定されているFDG-PETの標準化に関する指針として、「がんFDG-PET/CT撮像法ガイドライン」がある。しかし、これらの評価基準は最新技術に十分対応した基準とは言い難い。そこで本研究では、最新技術を搭載したPET/CT装置を対象にファントムデータを取得し、画質と定量値を評価するための画像評価手法の確立を目指す。

真川 明将

●名古屋市立大学病院 薬剤部 薬剤師



研究課題名

抗がん剤の腎障害における腎老化細胞の役割に関する基礎的研究

研究内容

近年、Onconephrologyという概念が提唱され、がんと腎臓の関係性は再び注目されている。薬剤性腎障害は進行性の腎機能低下と死亡につながる重篤な有害事象である。一般的に、がん患者は高齢であり、薬剤の代謝・排泄能力が低下しているだけでなく、腎細胞自体の老化により腎毒物への抵抗性が低下していることが予想される。しかしながら、老化による腎毒性の変動を評価可能な毒性評価系は報告がない。本研究では、ヒト老化腎細胞の三次元培養法について検討し、新たなin vitro腎毒性評価系の開発につなげたい。

岡田 直人

●徳島大学病院 薬剤部 薬剤師



研究課題名

臨床データと医療ビッグデータの融合による多層的データマイニング手法を基盤とした免疫チェックポイント阻害薬による致死的免疫関連有害事象の発現リスク評価法の構築

研究内容

免疫チェックポイント阻害薬(immune checkpoint inhibitor:ICI)は宿主免疫の賦活化により臓器横断的な抗腫瘍効果を示す一方で、免疫関連有害事象(immune-related adverse event:irAE)を引き起こす。特に、ICI関連心筋炎や間質性肺炎は致死的なirAEとして知られているが、その予防法は未だ確立していない。本研究は、臨床データと医療ビッグデータを融合させたデータマイニング手法により、臨床応用可能な致死的irAE発現リスク評価法の構築を目指す。

渋川 周平

● 東海大学医学部付属病院 放射線技術科 診療放射線技師



研究課題名

脳血流及び脳温度評価を用いた脳腫瘍放射線治療における脳壊死画像診断

研究内容

脳腫瘍に対する定位放射線治療が増加傾向にあるが、治療に伴う放射線脳壊死と腫瘍再発の鑑別が問題となっている。一般的な造影剤を使用したMRIでは放射線脳壊死と再発脳腫瘍のいずれにも造影効果を示すため、鑑別が困難である。そこで脳のラジエータである脳血流と代謝を反映する温度に着目した。我々はMRIを用いて造影剤による脳血流画像と拡散強調画像による脳室温度画像を撮像し、解析することで脳腫瘍の代謝を間接的に評価できる方法を開発する。この方法が確立できればMRIによる脳壊死画像診断の可能性が期待できる。

近藤 勝弘

● 名古屋市立大学大学院 医学研究科（附属病院 薬剤部） 病棟薬剤主査



研究課題名

腫瘍崩壊症候群リスクの個別化における「尿酸トランスポーター遺伝子解析」の有用性

研究内容

腫瘍崩壊症候群 (TLS) は化学療法による腫瘍細胞の崩壊、それに続く細胞内物質の放出によって起こる有害事象で、尿酸等の急上昇によって時に急性腎障害に至る。尿酸は「尿酸トランスポーター (UT)」によって排泄が制御されているが、UTの排泄能は遺伝子多型によって低下することが知られている。そこで我々は、UTの遺伝子多型とTLSとの関連に着目した。本研究では、TLS発症リスクの個別化を目指し、先行研究で見出したTLS発症例を対象にUTの遺伝子多型とTLS発症との関連を明らかにすることを目的とする。

平田 勝啓

● 京都大学医学部附属病院 病理部 主任臨床検査技師



研究課題名

新規免疫染色法を利用した病理診断の迅速化と精度向上に関する研究

研究内容

申請者が開発中の新規免疫染色法について、臨床検体を使用して性能評価・条件最適化を実施する。この免疫染色法は、一次抗体に対し簡便・短時間に酵素標識を行うことにより、1ステップで免疫染色を実施することができる。本法が病理診断に適用できることが示されれば、病理診断の迅速化、診断精度の向上に寄与すると期待できる。特に術中病理診断は多くの施設においてH.E染色またはパパニコロウ染色の形態観察だけで実施されているのが現状であり、本法を確立する意義は大きい。

松金 良祐

● 九州大学病院 薬剤部 薬剤師



研究課題名

日常診療情報の活用および患者遺伝子解析による免疫チェックポイント阻害薬の有害事象リスク因子の探索

研究内容

免疫チェックポイント阻害薬は優れた抗腫瘍効果を発揮する一方で、免疫関連有害事象 (immune-related adverse events, irAE) を多臓器で発症させる。当院ではirAE発症のリスク因子の同定を目的とし、irAE発生臓器や重症度、さらに治療前後の臨床検査値など日常診療情報を網羅した患者レジストリの構築を進めてきた。Human Leukocyte Antigen (HLA) は免疫反応を司る重要な遺伝子群であるが、特定のHLA遺伝子型の保持がirAEのリスク因子となる可能性が報告されている。本研究では、蓄積した患者レジストリとHLA遺伝子解析によりirAE発症のリスク患者を解析し、より安全な薬物治療の提供を目指す。

橋本 理恵子

● 大分大学 医学部看護学科 助教



研究課題名

AYA世代がん患者を支える看護相談における援助モデルの開発

研究内容

小児、成人期の狭間にあるAYA世代がん患者の看護は、AYA世代特有のアイデンティティ形成や発達・心理社会的課題への目配りが利かない可能性が高いといえます。AYA世代は、発達・社会的観点からは、大きく思春期と若年成人期に分けられ、若年成人は、就労し精神的・経済的に自立しはじめ、本人が意思決定の主体となり、結婚・養育を担い社会を支える役割があります。本研究では、そのような若年成人に焦点を当て、告知時から直面する発達・心理社会的課題に関して継続的に相談支援を行うための援助モデルの作成を目指している。

海外派遣研究助成委員会報告

委員長

関谷 剛男 (公益財団法人佐々木研究所 常務理事・研究所長)

1. 海外派遣研究助成事業について

(公財) がん研究振興財団は、がんに関する研究の推進を図るため研究助成を推奨するとともに、その成果を国民に還元・普及を図り、もってがんの予防・診断・治療に寄与することを目的に、種々の事業を行っています。

本委員会が担当しているのは、研究助成事業の中で行われる「海外派遣研究者への助成事業」です。がんを専門分野とする医師をはじめとする研究者による、短期間、海外で研究の発表、協議、施設調査、研究資料の収集等の先進的な研究活動に対して助成を行うものです。

応募の資格は、がんに関する基礎研究や臨床研究に従事する医師をはじめとする若手研究者で将来指導者として期待され、所属長からの推薦者となっております。2019年度の助成金額等は、事業計画の範囲で400万円を限度に1件20万円以内とし、20名程度の公募を行い、47件の応募がありました。

2. 海外派遣研究助成委員会について

2019年度の委員会は、3名の委員、亀口政史委員 (亀口公認会計士事務所所長)、中川原章委員 (公益財団法人佐賀国際重粒子がん治療財団理事長)、関谷剛男委員 (公益財団法人佐々木研究所所長) で構成されており、47件の申請案件を審査しました。

委員会としての助成決定に当たっては、

- (1) 参加希望学会の重要性を考慮する。
- (2) 同じ学会に参加する申請の場合、口演か、示説かを考慮する。
- (3) 一部の施設への助成に偏らないよう公平性を考慮する。
- (4) 過去に助成を受けた頻度を勘案し、特定個人に偏らないよう公平性を考慮する。
- (5) 本年度は20件の助成を行う。
- (6) 所属長の推薦理由を考慮する。
- (7) 若手医師等研究者への助成の観点から40歳を目途に年齢を考慮する。

以上を踏まえ、書面審査を含めて計10回の委員会において、慎重なる審議の結果、16名への助成を決定しました。

3. 2019年度の海外派遣研究助成

- 1) Digestive Disease Week 2019 (米国消化器病週間 サンディエゴ・アメリカ) 1名 (示説)
- 2) American Society of Colon and Rectal Surgeons Annual Scientific Meeting 2019 (米国直腸結腸外科学会定期学術集会 2019 グリーブランド・アメリカ) 2名 (口演1名 示説1名)

- 3) 16th World Congress of the European Association for Palliative Care (第16回欧州緩和ケア協会世界会議 ベルリン・ドイツ) 1名 (示説)
- 4) International Gastric Cancer Congress 2019 (国際胃癌学会総会 2019 プラハ・チェコ) 1名 (示説)
- 5) 15th International Conference on Malignant Lymphoma (第15回国際悪性リンパ腫会議 ルガーノ・スイス) 1名 (示説)
- 6) Asia Pacific Hospice Conference 2019 (アジア太平洋ホスピス会議 2019 スラバヤ・インドネシア) 1名 (口演)
- 7) 17th Human Proteome Organization World Congress および International Cancer Proteogenome Consortium (第17回世界ヒトプロテオーム会議およびICPC代表者会議 アデレード・オーストラリア) 1名 (口演)
- 8) United European Gastroenterology Week 2019 (欧州消化器病週間 2019 バルセロナ・スペイン) 2名 (口演1名示説1名)
- 9) 16th International Conference of the Society for Integrative Oncology (第16回統合腫瘍学会国際会議 ニューヨーク・アメリカ) 1名 (示説)
- 10) The 2019 Supportive Care in Oncology Symposium (アメリカ臨床腫瘍学会サポーターティブケアシンポジウム サンフランシスコ・アメリカ) 1名 (示説)
- 11) 24th Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology (第24回北米脳腫瘍学会 フェニックス・アメリカ) 1名 (示説)
- 12) The European Society for Diseases of the Esophagus 2019 (ヨーロッパ食道病学会 2019 アテネ・ギリシャ) 1名 (口演)
- 13) ESMO (European Society for Medical Oncology) Asia Congress 2019 (欧州臨床腫瘍学会アジア大会 2019 シンガポール・シンガポール) 1名 (示説)
- 14) 13th European Colorectal Congress (第13回欧州大腸肛門病学会 ザンクトガレン・スイス) 1名 (示説)

4. 海外派遣研究助成の成果

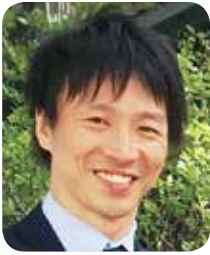
海外の学術集会に参加し研究成果を発表することは、医師をはじめとする研究者等が、そのがん研究の方向性を確認する貴重な機会です。また、世界の動向を直接感知する貴重な機会です。この活動を助成することの意義は、海外学会参加で得たものをがん研究者間で、また本事業に寄付を頂いた方々と研究者との間で分かち合うことにあると考えます。助成対象者は、帰国後1ヶ月以内に研究成果報告書、その他参考となる資料を当財団に提出することになっています。この報告は財団ホームページで閲覧することが出来ます。

2019年度 海外派遣研究助成金受賞者

	氏名	所属	派遣先	開催地
1	市島 諒二	日本大学病院	Digestive Disease Week 2019 (米国消化器病週間)	サンディエゴ (アメリカ)
2	山本 健人	京都大学 医学部附属病院	American Society of Colon and Rectal Surgeons Annual Scientific Meeting 2019 (米国直腸結腸外科学会定期学術集会 2019)	グリーンブランド (アメリカ)
3	小花 彩人	柏厚生総合病院	American Society of Colon and Rectal Surgeons Annual Scientific Meeting 2019 (米国直腸結腸外科学会定期学術集会 2019)	グリーンブランド (アメリカ)
4	西山菜々子	NPO 法人 JORTC	16th World Congress of the European Association for Palliative Care (第 16 回欧州緩和ケア協会世界会議)	ベルリン (ドイツ)
5	錦織 達人	京都大学 医学部附属病院	International Gastric Cancer Congress 2019 (国際胃癌学会総会 2019)	プラハ (チェコ)
6	鈴木 隆晴	新潟大学医学部	15th International Conference on Malignant Lymphoma (第 15 回国際悪性リンパ腫会議)	ルガーノ (スイス)
7	結束 貴臣	横浜市立大学附属病院	Asia Pacific Hospice Conference 2019 (アジア太平洋ホスピス会議 2019)	スラバヤ (インドネシア)
8	野口 玲	国立がん研究センター 研究所	17th Human Proteome Organization World Congress および International Cancer Proteogenome Consortium (第 17 回世界ヒトプロテオーム会議および ICPC 代表者会議)	アデレード (オーストラリア)
9	木本 義明	NTT 東日本関東病院	United European Gastroenterology Week 2019 (欧州消化器病週間 2019)	バルセロナ (スペイン)
10	岸田 圭弘	静岡県立 静岡がんセンター	United European Gastroenterology Week 2019 (欧州消化器病週間 2019)	バルセロナ (スペイン)
11	鈴木 梢	がん・感染症センター 都立駒込病院	16th International Conference of the Society for Integrative Oncology (第 16 回統合腫瘍学会国際会議)	ニューヨーク (アメリカ)
12	寺田 立人	国立がん研究センター 東病院	The 2019 Supportive Care in Oncology Symposium (アメリカ臨床腫瘍学会サポーターケアシンポジウム)	サンフランシスコ (アメリカ)
13	清水勇三郎	順天堂大学医学部	24th Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology (第 24 回北米脳腫瘍学会)	フェニックス (アメリカ)
14	國府田華子	国立国際医療研究 センター	The European Society for Diseases of the Esophagus 2019 (ヨーロッパ食道病学会 2019)	アテネ (ギリシャ)
15	結城 緑	国立がん研究センター 東病院	ESMO (European Society for Medical Oncology) Asia Congress 2019 (欧州臨床腫瘍学会アジア大会 2019)	シンガポール (シンガポール)
16	今泉 健	北海道大学	13th European Colorectal Congress (第 13 回欧州大腸肛門病学会)	ザンクトガレン (スイス)

山本 健人

● 京都大学医学部附属病院 消化管外科 大学院生



派遣先／渡航期間

American Society of Colon and Rectal Surgeons Annual Scientific Meeting 2019
(米国直腸結腸外科学会定期学術集会 2019) (グリーンブランド、アメリカ) / 2019.6.1 ~ 6.6

研究内容

局所進行直腸癌の再発危険因子と至適治療に関する研究発表を行った。進行直腸癌に対しては術前化学放射線療法(nCRT)、術前化学療法および側方郭清が行われているが、それぞれの適応条件のコンセンサスは得られていない。我々は過去13年間に手術を施行した直腸癌症例を後方視的に解析し、骨盤腔内再発、側方リンパ節再発、遠隔再発それぞれの再発形式に応じて危険因子が全く異なること、骨盤腔内再発リスクの高い症例に選択的にnCRTを行う必要があることを示した。今後の治療選択に示唆を与える重要な研究であると考えている。

小花 彩人

● 柏厚生総合病院 外科 医員



派遣先／渡航期間

American Society of Colon and Rectal Surgeons Annual Scientific Meeting 2019
(米国直腸結腸外科学会定期学術集会 2019) (グリーンブランド、アメリカ) / 2019.5.31 ~ 6.6

研究内容

「StageII大腸癌の占拠部位における再発危険因子の相違点～右側結腸と左側結腸の比較～」の内容で口頭発表を行った。右と左の大腸は同じ臓器でありながら発生的に違う由来であり、左右でRASやBRAF等の発現に有意差がある事が知られている。今回我々はRetrospectiveにStageII大腸癌患者の根治術後の病理学的評価を見直して、再発へ影響する独立危険因子を比較分析した。病理学的側面から見た比較は少ないため米国人も非常に興味を示してくれ、ディスカッションでも様々な質問議論を呼んだ。受けた指摘をもとに更なる研究発展の参考とすることができた。

西山 菜々子

● NPO 法人 JORTC 臨床研究部門 外来研究員



派遣先／渡航期間

16th World Congress of the European Association for Palliative Care
(第16回欧州緩和ケア協会世界会議) (ベルリン、ドイツ) / 2019.5.21 ~ 5.27

研究内容

ベルリンで開催されたWorld congress of EAPCでは、終末期がん患者に対するリハビリテーションについて行った単施設後ろ向き調査研究の成果報告として、「What is the Purpose of the Massage Used by Rehabilitation Therapists for Terminal Cancer Patients?」というテーマでポスター発表を行った。学会参加者とのディスカッションを通して、今後の研究課題についての示唆が得られた。また2019年度に研究協力者として参加していたWHOのreview研究の代表研究者と、同学会中に面談を設定し、直接ディスカッションする機会が得られた。これにより、国際共同研究を進める際のコミュニケーションを円滑にすることができた。

錦織 達人

● 京都大学医学部附属病院 医療安全管理部・消化管外科 助教



派遣先／渡航期間

International Gastric Cancer Congress 2019
(国際胃癌学会総会 2019) (ブラハ、チェコ) / 2019.5.8 ~ 5.12

研究内容

80歳以上の高齢者胃癌患者を対象とした予後予測ノモグラムの開発について発表した。StageI-III胃癌に対し、日本国内10施設で手術を実施した80歳以上の患者660人を対象とした。術後3年以内に225人の患者が死亡し、うち94人(42%)は他病死であった。腫瘍学的因子の他に併存症、低栄養といった予後予測因子を同定し、予後予測が可能なノモグラムを作成した。本発表を通じ、高齢化が進む日本の胃癌治療の現状と予後を個別化するという1つの解決策を海外の研究者と共有することができたと考えている。

鈴木 隆晴

●新潟大学医学部 病理学講座 特別研究生



派遣先／渡航期間

15th International Conference on Malignant Lymphoma
(第15回国際悪性リンパ腫会議) (ルガーノ、スイス) / 2019.6.16～6.23

研究内容

第15回国際悪性リンパ腫会議においてNodal peripheral T-cell lymphoma with Tfh phenotype (PTCL with Tfh-phenotype)の臨床病理学的解析についてポスター発表した。発表当日、PTCL with Tfh-phenotypeにおいてもAITLで認めるRhoA mutation(G17V)などのゲノム異常やmRNAレベルでの研究が必要になると議論を行った。今後の研究の参考になり、とても有意義な会となった。

結束 貴臣

●横浜市立大学附属病院 緩和ケアセンター 助教



派遣先／渡航期間

Asia Pacific Hospice Conference 2019
(アジア太平洋ホスピス会議2019) (スラバヤ、インドネシア) / 2019.8.1～8.5

研究内容

がん患者におけるオピオイド誘発性便秘(OIC)に対する様々な便秘薬の効果と副作用に前向き観察研究を行った。その中でナルデメジンは末梢性 μ オピオイド受容体阻害薬という新規の機序によるOIC治療薬であり、既存の緩下薬を中心とした治療と比較してよりQOLの改善を認めたことを報告した。同研究の報告は過去にほとんど報告がなく関心の高さが伺え、英語の口頭発表に加え、ディスカッションでも貴重な意見をいただくことができ、さらなる研究発展の参考とすることができた。

野口 玲

●国立がん研究センター研究所 希少がん研究分野 研究員



派遣先／渡航期間

**17th Human Proteome Organization World Congressおよび
International Cancer Proteogenome Consortium**
(第17回世界ヒトプロテオーム会議およびICPC代表者会議) (アデレード、オーストラリア) /
2019.9.11～9.15

研究内容

“Proteogenomic approach focused on osteosarcomas with different original sites: Reported by ICPC JAPAN team”という演題をポスター発表した。発生母地が異なる骨巨細胞腫は治療法や予後が異なることを網羅的キナーゼ活性解析とがん関連遺伝子のパネルシーケンスの結果をもとにプロテオゲノミクスの視点で解析した研究について報告した。各諸国の方とディスカッションを行い、今後の課題を得ることができ、研究発展の参考とすることができた。

岸田 圭弘

●静岡県立静岡がんセンター 内視鏡科 副医長



派遣先／渡航期間

United European Gastroenterology Week 2019
(欧州消化器病週間2019) (バルセロナ、スペイン) / 2019.10.17～10.25

研究内容

「上部消化管狭窄に対する内視鏡的拡張術の合併症に関する多施設研究」では、上部消化管狭窄に対する内視鏡的バルーン拡張術について多施設のデータを集積し、偶発症リスクについて明らかにした。また「内視鏡的切除した大腸ポリープの回収時の検体損傷を防ぐ工夫と、その病理学的影響に関する検討」では、大腸内視鏡検査でポリープを切除した際の、より良好な病理評価を得るための病変の回収方法についての検討成果を発表した。両演題とも、質問者との有意義なディスカッションを通して、今後のさらなる研究の参考とすることができた。

鈴木 梢

●がん・感染症センター都立駒込病院 緩和ケア科 医員



派遣先／渡航期間

16th International Conference of the Society for Integrative Oncology
(第16回統合腫瘍学会国際会議) (ニューヨーク、アメリカ) / 2019.10.18～10.23

研究内容

「がん患者における自由診療での免疫療法の使用実態」について示説発表を行った。患者は、他の補完代替医療と比べ、自由診療での免疫療法に対し過度な期待を持っていること、経済的な負担を感じていること、標準治療中断例が多いことなどを示した。海外では補完代替医療として免疫療法が取り扱われることはなく、本邦の独特な自由診療の立ち位置を実感することができた。統合医療として、がん患者のQOLを向上させるための補完代替医療についてのエビデンスを構築するための活発な議論が行われており、今後の研究の参考とすることができた。

清水 勇三郎

●順天堂大学医学部 脳神経外科 助教



派遣先／渡航期間

24th Annual Scientific Meeting and Education Day of the Society for Neuro-Oncology
(第24回北米脳腫瘍学会) (フェニックス、アメリカ) / 2019.11.21～11.25

研究内容

「パイロシーケンスを用いた小児脳腫瘍のKIAA1549-BRAF融合遺伝子同定法」の示説発表を行った。これまで、ダイレクトシーケンスやRT-PCR法にて同定されていたKIAA1549-BRAF融合遺伝子だが、パイロシーケンス法でも簡便に検出可能であることを示し、参加者とのディスカッションでは今後の参考になるような意見交換ができた。また米国留学中に指導を受けた医師とミーティングを行い、現在自施設で進行中の基礎実験に関する経過報告および今後の方針に関する討議をした。短期間ではあったが、今後の臨床・研究の飛躍につながる学会参加になったと考えている。

國府田 華子

●国立国際医療研究センター 初期臨床研修医



派遣先／渡航期間

The European Society for Diseases of the Esophagus 2019
(ヨーロッパ食道病学会2019) (アテネ、ギリシャ) / 2019.11.20～11.24

研究内容

食道扁平上皮癌細胞におけるE-カドヘリンの発現と臨床病理学的予後との関連について口頭発表を行った。正常上皮細胞で細胞間接着・分化に重要な役割を担うとされるE-カドヘリンの発現を食道扁平上皮癌において新規に検討し、その発現様式に着目することで、E-カドヘリンの“細胞膜からの消失”が食道扁平上皮癌の進行において重要な役割を担っていることを見出した。欧米では食道腺癌が主流だが、日本などアジア諸国では未だ扁平上皮癌が主流であり、最新の知見を組織型においても対比して吟味でき、今後の研究発展の参考となった。

結城 緑

●国立がん研究センター東病院 緩和医療科 短期レジデント



派遣先／渡航期間

ESMO (European Society for Medical Oncology) Asia Congress 2019
(欧州臨床腫瘍学会アジア大会2019) (シンガポール、シンガポール) / 2019.11.21～11.25

研究内容

未成年の子供を持つがん患者のオンラインのがんコミュニティにおいて行った調査において、がん患者の35%に経済的困窮が認められたが、その影響を及ぼす要因について報告をした。要因としては進行期、転移の存在、がんの再発、抗腫瘍薬の使用、フルタイムの仕事、仕事状況の変化、および収入の減少が関連していることが示唆された。ディスカッションでは、経済的困窮から起こりうる抑うつやQOLなどをエンドポイントとすることで今後の対応策を練ることができるのではないかなど、非常に有意義な話し合いができた。



派遣先／渡航期間

13th European Colorectal Congress
(第13回欧州大腸肛門病学会) (ザンクトガレン、スイス) / 2019.11.30 ~ 12.5

研究内容

「経腹壁造影超音波検査による結腸癌所属リンパ節転移の術前診断の有用性」についてPoster sessionにて発表を行った。内容は、結腸癌の術前リンパ節転移診断に、経腹壁超音波は有用であり、造影評価を併用することでリンパ節転移の重症度をより正確に評価できるというものであった。内容に関する質問や他の演題でも術前評価に着目したものがあり、発展性のある研究分野であることを再認識した。今後の研究の発展において非常に有意義な場になったと考えている。

看護師・薬剤師・技師等 海外研修選考委員会報告

委員長

桑原 節子（淑徳大学看護栄養学部 教授）

がん医療は大きな変革の時を迎えている。がんの診断・治療には、重厚な放射線診断、治療機器の他、内視鏡手術やロボット支援手術の導入も進んでいる。また、がん研究の成果に基づき、がんの病態の解明が進み、個々の患者について細胞がん化のパスウェイが明らかにされ、その情報に基づく分子標的治療も進化している。一方で、がん対策基本法、がん対策推進計画の前後で患者・家族の悩みや負担についての全国調査を行った結果では、がんの薬物療法に関わる悩みや負担が顕著に増加していた。手術治療や放射線治療が、それぞれ縮小手術やピンポイント照射を目指しているなかで、薬物療法は、術後補助薬物療法が一般的になり、医療現場が十分には熟知していない分子標的薬が増え、多くの患者が通院で薬物療法を受けるといった状況が生まれているためと考えられる。従って、がん薬物療法の副作用軽減のための支持療法の普及も現代のがん医療にとっての急務の課題である。

このような状況に対応するためには、がんという病変を治療するとともに、患者・家族の心のケアや暮らしにまで配慮しながら治療にあたるという社会的な全人的医療が重要となる。そこでその両者を実現するためには、基礎医学者や臨床医とともに、治療や心のケアや暮らしの支援を担当する様々な職種との協働作業を実践するための多職種チーム医療が一つの解決策となる。

しかるに、我が国では、がん医療に習熟した医師以外の医療スタッフが不足している。具体的には、看護師・薬剤師・検査技師・リハビリテーション技師・臨床心理士・栄養士・ソーシャルワーカーなどである。医師のレジデント制度や研修制度によって、がん医療に習熟した医師の育成は何十年も前から試みられ、一定の成果を上げているが、医師以外の職種についての養成プログラムはあまり手がつけられてこなかった。

がん研究振興財団では、がん医療に携わる基礎医学者や医師以外の医療スタッフを対象とした看護師・薬剤師・技師等海外研修制度を運用してきた。

2019年度には、計7名が本プログラムによって海外研修を受けた。7名の職種は、診療放射線技師が4名、看護師が2名、薬剤師が1名で、所属は、徳島大学病院、千葉大学医学部附属病院、がん研究会有明病院、金沢大学附属病院、金沢大学大学院、福井大学医学部附属病院、名古屋市立大学大学院医学研究科附属病院が各1名であった。主な研修先はアメリカが5名、カナダ、イギリスが各1名であり、著名な医療機関での研修と関連学会への出席というスケジュールが一般的で、研修期間は1週間程度であった。こうした研修報告の一部は、財団ホームページ及び機関誌「加仁」にも寄稿されており、海外施設での研修を通して、自らの能力を高め、所属施設のレベル向上に役立てている様子が見て取れる。

現在の助成制度は年間約10名を公募し、公募要項は財団のホームページで入手可能である。助成対象者に対しては、所属長の推薦が必要で研修に必要な語学力を有し、研修先からの招聘状があることなどといった条件が付されている。委員会では応募書類について審議し、助成の可否を決定しているが、現

在の委員は別表の3名で構成されている。

本事業の課題は、全国的な周知が十分ではなく、また研修希望があったとしても、所属医療機関が忙しい日常診療の間を縫って職員に海外研修を受けさせることが容易ではない点である。しかし、昨今のがん医療における大きな変革の中で、医療機関の意識変革も進み、がん医療における多職種チーム医療の重要性が認識されるようになった。その中で、すべての職種を対象に海外研修を支援する助成制度は国内には例がなく、また規模的にも本制度が最大である。今後、本助成制度がより広く活用され、一人でも多くのがん医療に習熟した医療スタッフが養成されることを期待したい。

看護師・薬剤師・技師等海外研修選考委員会

	氏名	所属
委員長	桑原 節子	淑徳大学 看護栄養学部栄養科 教授
委員	飯野 京子	国立看護大学校看護学部 教授
委員	阿部 容久	国立研究開発法人国立がん研究センター中央病院 放射線技術部

2019年度 コメディカル海外研修助成金受賞者

	部門	氏名	所属	研修施設・国際会議等	研修国・都市
1	看	中野貴美子	徳島大学病院	Oncology Nursing Society 44th Annual Congress	アメリカ・アナハイム
2	放	村田 泰輔	千葉大学 医学部附属病院	Society of Nuclear Medicine and Molecular Imaging 2019 Annual Meeting	アメリカ・アナハイム
3	放	宮司 典明	公益財団法人 がん研究会有明病院	Society of Nuclear Medicine and Molecular Imaging 2019 Annual Meeting	アメリカ・アナハイム
4	放	越野 有希	金沢大学附属病院	International Society for Magnetic Resonance in Medicine 27th Annual Meeting&Exhibition	カナダ・モントリオール
5	看	大橋 史弥	金沢大学大学院	The University of Nottingham	イギリス・ノッティンガム
6	放	木下 尚紀	福井大学 医学部附属病院	American Association of Physicists in Medicine 2019 Annual Meeting	アメリカ・サンアントニオ
7	薬	近藤 勝弘	名古屋市立大学大学院 医学研究科附属病院	American Society of Nephrology Kidney Week 2019	アメリカ・ワシントン

中野 貴美子 ●徳島大学病院 看護部 看護師



研修施設等／渡航期間

Oncology Nursing Society 44th Annual Congress

場所：Anaheim Convention Center（アナハイム・アメリカ）／2019.4.10～4.15

研修内容

ポスターセッションでは、Motivation for physical activity in patients before and after hematopoietic stem cell transplantation（造血幹細胞移植患者の身体活動の動機）というテーマでe-poster発表を行った。造血幹細胞移植患者の身体活動を促進するためには、移植を受ける患者に対して、移植前からセルフケアを中心とした教育的関りが必要であることを論議できた。今回の学びを次の研究に活かしていきたい。

村田 泰輔 ●千葉大学医学部附属病院 放射線部 診療放射線技師



研修施設等／渡航期間

**Society of Nuclear Medicine and Molecular Imaging 2019 Annual Meeting
Anaheim Convention Center（アナハイム・アメリカ）／2019.6.21～6.27**

研修内容

「Feasibility of high-resolution head and neck PET/CT imaging while maintaining accurate PET quantitation」という演題でポスター発表を行った。本研究では、定量値を調和化するフィルタ処理を用いて頭頸部PET画像の高解像化と安定した定量計測の両立を可能にした。本手法は頭頸部がんの診断能向上に寄与できると考える。会場の研究者の方々と、フィルタ処理による影響や高分解能化の臨床的有用性について意見交換を行った。今後、本研究をより深めていくための良い機会となった。

宮司 典明 ●公益財団法人がん研究会有明病院 画像診断センター 診療放射線技師



研修施設等／渡航期間

**Society of Nuclear Medicine and Molecular Imaging 2019 Annual Meeting
Anaheim Convention Center（アナハイム・アメリカ）／2019.6.21～6.27**

研修内容

「核医学領域における水晶体被ばくの適正な評価方法の決定」というテーマでポスター発表を行った。日本では水晶体被ばくの新たな線量限度が2021年に導入されることがほぼ決定されている。本研究では、5種類の線量計を用いて、核医学領域の適切な装着部位と線量計を決定した。眼部付近に装着する水晶体被ばく専用の線量計が放射性核種による影響も少なく、信頼性の高い結果が得られたことに対して聴講者から関心が寄せられた。また、本総会は米国の核医学会最大のイベントであり、最新核医学の動向と欧米での水晶体被ばくに関する海外動向を探ることができた。

越野 有希 ●金沢大学附属病院 放射線部 診療放射線技師



研修施設等／渡航期間

**International Society for Magnetic Resonance in Medicine 27th Annual Meeting&Exhibition
モントリオール国際会議場（モントリオール・カナダ）／2019.5.11～5.18**

研修内容

「腎の水負荷前後におけるTriexponential関数拡散解析」について電子ポスター発表を行った。MRIで得られる拡散強調画像はその信号に血管および細胞密度に関する情報が内在するため、これら機能情報を分離し評価できれば非侵襲的に腎腫瘍の質的診断が可能となる。本研究では水負荷前後で得られる拡散解析値が腎の機能情報変化を反映できることが明らかとなったため、今後は腎腫瘍例において本手法を適用する予定である。海外の研究者と解析法の優位性や問題点について意見交換を行うことができ、新たな腎腫瘍診断法の確立に繋がる有意義な学会となった。

大橋 史弥 ●金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 保健学専攻 博士後期課程1年



研修施設等／渡航期間

**The University of Nottingham
Nottingham University Hospital（ノッティンガム、イギリス）／2019.8.31～9.8**

研修内容

世界各国を代表する研究者や大学院生等が集い、がん術後のリンパ浮腫や創傷ケアに関する講義・演習、臨床調査を実施した。また、自身の研究活動を報告、海外研究者との討論を行った。臨床調査では諸外国の医師・看護師、現地病院スタッフとチームを組み、がん術後に手術創が離開している患者やリンパ浮腫患者の創傷ケア見学・アセスメントの場に参加した。医療者が行うアセスメントに患者自身も積極的に参加する姿があった。良好な信頼関係が、がん術後の早期回復に向けたモチベーション維持・向上に繋がることをイギリスの地で学んだ。

木下 尚紀

●福井大学医学部附属病院 放射線部 診療放射線技師



研修施設等／渡航期間

American Association of Physicists in Medicine 2019 Annual Meeting
Henry B. Gonzalez Convention Center (サンアントニオ、アメリカ) / 2019.7.12 ~ 7.20

研修内容

放射線治療の線量評価は、放射線治療用の線量計(検出器と電位計)を用いて行われる。その評価の際、診療放射線技師・医学物理士は、測定対象に合わせて適切な検出器を電位計に接続し、測定を実施する機会が多く、検出器と電位計を個別に管理するのが望ましい。我々は、第61回米国医学物理学学会学術大会で電荷発生装置を備えた電位計を用いた電位計の点検方法を紹介した。学会期間中に多くの研究者と本研究について議論ができ、有意義な学会であった。このような機会を与えて頂いたがん研究振興財団の皆様により感謝申し上げます。

近藤 勝弘

●名古屋市立大学大学院医学研究科附属病院 薬剤部 薬剤師



研修施設等／渡航期間

American Society of Nephrology Kidney Week 2019
Walter E. Washington Convention Center (ワシントン、アメリカ) / 2019.11.6 ~ 11.12

研修内容

「多発性骨髄腫(MM)患者における腫瘍崩壊症候群(TLS)発症リスクに関する“ボルテゾミブ”と“性別”の与える影響」という演題でポスター発表を行った。TLSは化学療法による腫瘍細胞の崩壊に伴って発症する有害事象で、時に急性腎障害に至る。本研究では、これまで報告の乏しいMMにおけるTLSのリスク因子について検討した。当学会が提唱する「腫瘍学と腎臓学を交えた概念 (Onco-Nephrology)」に基づき海外の研究者と意見交換でき大変有意義であった。今回得た知識や経験を今後活かしたい。

HOPE事業等運営委員会報告

委員長

上田 龍三 (愛知医科大学 教授)

1. がんになっても生きる希望を持てる事業 (HOPE事業) について

国の「がん研究10か年戦略」による研究支援事業を継続的に推進・支援していくため、平成27年度からの本財団事業として、がんになっても生きる希望を持てる事業（以下「HOPE事業」という。）を実施しております。

私は平成28年6月から当委員会の委員長として研究助成事業及び、個人または団体から用途の特定がなされて実施する「特別寄付金」による研究助成事業の審議に携わっております。

本事業の実施に当たっては、民間企業からの賛助金によりがん研究者に対する研究支援を行うものがありますので、ご理解ご協力の程宜しくお願い致します。

「がん」の撲滅は、多くの方々の悲願であり、その取り組みは官民挙げて診療、医薬品、医療機器の開発など大きな成果を上げております。

微力ではありますが、HOPE事業の発展に貢献できれば幸いです。

2. HOPE事業等運営委員会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の5名により構成されています。(五十音順)

上田 龍三 (愛知医科大学 教授)

坂元 亨宇 (慶應義塾大学 教授)

菅野 純夫 (東京医科歯科大学)

村上 善則 (東京大学医科学研究所 教授)

吉倉 廣 (国立感染症研究所 名誉所員)

3. HOPE事業等について

シニア・リサーチフェロー研究助成金

がん研究の第一線で活躍されている研究者の指導を受け、将来の我が国のがん研究の中核となる若手研究者を育成するため、今までにない将来を見据えた研究実績を持つ若手上級研究者を対象とした育成事業です。2019年度の7名の応募者は書類審査では全員の確であった為、7名全員に対して、研究の内容及び展望、将来の進路などに関する面接試験を施行した結果、下記の5名が合格されました。シニア・リサーチフェローとしてキャリアアップに繋がるような夢のある研究成果を期待しております。

○ 2019 年度の助成（実績）

1 件 300 万円助成 5 件 助成額 1,500 万円

	氏名	所属機関	研究課題
1	江畑 貴大	国立がん研究センター中央病院	術前化学療法後卵巣癌のジェネティックおよびエピジェネティック網羅的解析
2	神田 裕介	国立がん研究センター研究所	難治性がんの組織多様性の解析を通じた治療抵抗性細胞の同定及び革新的治療戦略の構築
3	下村 巖	国立がん研究センター研究所	CRISPR-Cas9 により正常細胞へ導入された遺伝子変異の発がんへの寄与率の網羅的探索
4	新垣 清登	国立がん研究センター研究所	B 細胞リンパ腫における PD-L2 の生物学的役割と発現制御機構の解明
5	高柳 大輔	国立がん研究センター研究所	ゲノム解析に基づく宿主における発がんリスクに関わる免疫応答ネットワーク機構の解明

4. HOPE 事業の研究成果について

幅広い分野の柔軟な発想を持った若手の人材をがん研究領域に積極的に取り込み、支援することを目的として、平成 27 年度からシニア・リサーチフェローを新規事業として取り組んできました。

がん研究振興財団が昭和 59 年からリサーチ・レジデントの育成事業を国庫補助により委託し、平成 26 年度までに約 900 名ががん研究、がん医療の第一線で広く活躍しておりますが、多くの研究者からの要望を踏まえ、リサーチ・レジデント終了者を念頭に、活力ある上級若手研究者の育成を民間企業の皆様からの賛助により実施しております。

国の財政が厳しい中、研究助成事業を含め若手研究者の育成に向けた本事業は、財団に期待される事業の一つであります。

江畑 貴大

● 国立がん研究センター中央病院 先端医療科 がん専門修練医



研究課題名

術前化学療法後卵巣癌のジェネティックおよびエピジェネティック網羅的解析

研究内容

卵巣がんにおいて治療抵抗性機序の大部分はいまだに不明である。本研究では、抵抗性の細胞が優位に存在すると考えられる治療後の臨床検体を用いて、抵抗性に関わる因子の同定とその機序を明らかにすることを目的としている。遺伝子変異および網羅的なDNAメチル化解析を行い、候補として6個の遺伝子のDNAメチル化を同定した。引き続きバリデーションを行い、同定された遺伝子の抵抗性獲得機序の解明することで将来の新規治療開発につなげたい。

神田 裕介

● 国立がん研究センター研究所 がん分化制御解析分野 特任研究員



研究課題名

難治性がんの組織多様性の解析を通じた治療抵抗性細胞の同定及び革新的治療戦略の構築

研究内容

白血病等では休止型がん幹細胞と治療抵抗性との関連が明らかにされているが、大腸がんを含む固形がんにおいて同様の細胞が存在するかどうかについては明らかではない。我々は、大腸がん患者由来オルガノイドにおいて休止型細胞を標識、同定する系を構築した。樹立したオルガノイドのマウス移植腫瘍を用いた実験により、休止型細胞が抗がん剤抵抗性を示す事、さらにシングルセル解析により、休止型細胞が幹細胞マーカーを発現する事を見出した。同定した治療抵抗性がん幹細胞は大腸がん治療標的として重要である事が示唆された。

下村 巖

● 国立がん研究センター研究所 分子細胞治療研究分野 外来研究員



研究課題名

CRISPR-Cas9により正常細胞へ導入された遺伝子変異の発がんへの寄与率の網羅的探索

研究内容

がんは遺伝子の病気であり、肺がんでは喫煙の関与とともに、EGFR、ALKなどの遺伝子変異が発がんの重要な機序として注目されている。発がんにおける遺伝子変異の影響の検証のため、我々は、CRISPR-Cas9を用い、正常細胞に対して複数の多段階的な遺伝子変異を導入し、実際の病態に近い発がんモデルの作製を試みた。現在、発がん過程に関与する遺伝子変異の寄与率の定量的な解析を行っている。この研究から、ゲノムの異常を正常細胞において正確に反映し、再現するシステムの確立を目指したい。

新垣 清登

● 国立がん研究センター研究所 分子腫瘍学分野 外来研究員



研究課題名

B細胞リンパ腫におけるPD-L2の生物学的役割と発現制御機構の解明

研究内容

PD-L2がB細胞リンパ腫特異的ドライバー異常として機能する可能性を我々は見出したが、その悪性腫瘍における生物学的意義や発現制御機構はほとんど未解明のままである。PD-L2発現制御候補部位を対象にsgRNAライブラリーを設計し、CRISPRスクリーニングを実施することにより、PD-L2発現制御領域を網羅的に同定した。更に、これらの領域に結合する転写因子のノックアウトにより、PD-L2発現量が変化することを明らかにした。引き続きB細胞リンパ腫特異的PD-L2発現制御機構の解明に取り組んでいきたい。

高柳 大輔

● 国立がん研究センター研究所 ゲノム生物学研究分野 任意研修生



研究課題名

ゲノム解析に基づく宿主における発がんリスクに関わる免疫応答ネットワーク機構の解明

研究内容

がんゲノム解析によりHLA遺伝子は発がんにおけるドライバー変異の一つとして考えられている。これまで、当研究室ではHLA遺伝子に位置するバリエーションが肺腺がんに対する発がんリスクに関わることを見出してきた。本研究では、肺がんに対する発がんリスクに関わるHLAアレルを同定し、そのHLAアレルが免疫応答の差異に影響を与えるかを検討した。その結果、発がんリスクに関わるHLAアレルではネオアンチゲン数が少なく、またがんを高頻度に認めるHLA領域の欠失が有意に起きにくいことを見出した。今後は他のがん種で同様の検討を行う予定である。

がんサバイバーシップ研究支援事業 運営委員会報告

委員長

石塚 正敏 (跡見学園女子大学 教授)

1. がんサバイバーシップ研究支援事業の趣旨・目的

がんの診断や治療を受けた“その後”を生きていくプロセス全体として、がんが長く付き合う慢性病に変化しつつある今日、「診断から治療後も充実した社会生活を送る」ための研究支援が喫緊の課題となっています。このため、(公財)がん研究振興財団は2015年度からの新規事業として、我が国のがんサバイバーシップに関する研究の進歩・発展に大きく貢献できる研究課題に対する支援事業を実施しております。

この研究支援事業については、患者本人や家族が本来の生活の場所—家庭、職場、学校、地域コミュニティなど—で暮らしていく過程で直面する、差別・偏見等の様々な課題解決に関する研究を確立するという大きな目標を有することから、民間企業からの賛助金により実施することとしています。

2. がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の8名により構成されています。(委員名簿：五十音順)

天野 慎介 (一般社団法人全国がん患者団体連合会 理事長)

石塚 正敏 (跡見学園女子大学 教授)

桑原 節子 (淑徳大学 教授)

児玉 哲郎 (栃木県立がんセンター 名誉所長)

竹内 朋子 (東京医療保健大学 准教授)

田中 徳雄 (日本製薬工業協会 常務理事)

中川原 章 (公益財団法人佐賀国際重粒子線がん治療財団 理事長)

松田 周作 (富士フイルム株式会社ヘルスケア事業推進室マネージャー)

3. 2019年度のがんサバイバーシップ研究支援事業について

(1) がんサバイバーシップ研究助成課題の公募

「診断から治療後も充実した社会生活を送る」ため、我が国のサバイバーシップに関する研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究課題について、2019年5月1日～6月14日の間、個人・団体・企業等を対象に公募を行い、21課題の応募を得ました。なお、応募資格については特に限定せずに広く募集しました。

(2) 2019年度の助成（実績）

運営委員会において審議した結果、10 課題を採択しました。

（10 課題 助成総額 420 万円）

	氏名	所属機関	研究課題
1	内田 恵	名古屋市立大学病院 緩和ケア部	がん治療後も残存する倦怠感と精神心理的苦痛を軽減するためのウェブツールの開発
2	平山 貴敏	国立がん研究センター中央病院 精神腫瘍科	スクリーニングツールを活用した AYA 世代がんサバイバーシップケアの開発
3	森下慎一郎	新潟医療福祉大学 リハビリテーション学部	乳がんサバイバーの続発性リンパ浮腫を予防し、QOLを向上させるための予防的リハビリテーション方法の検討
4	松井 基浩	東京都立小児総合医療センター 血液・腫瘍科	AYA 世代がん患者の心理社会的困難及び成長に関する調査研究 2年後コホート研究
5	尾瀬 功	愛知県がんセンター がん予防研究分野	胃がん・大腸がんサバイバーの治療後のうつと関連する社会的・経済的要因の探索
6	関 由起子	埼玉大学 教育学部	小児がん患児への特別支援教育の新たな役割： 未来志向の教育に向けて
7	大塚 泰正	筑波大学 人間系	がんサバイバーの就労を支援するキャリアカウンセリング法の開発ー働くことの意味づけと回復期の心理的適応プロセスの関連ー
8	山邊 恵里	筑波大学大学院 人文社会ビジネス科学学術院	がんサバイバーのための合理的配慮 ー就労を通じた社会参画にむけた権利性の法的考察ー
9	木下由美子	宮崎大学 医学部看護学科	前立腺がんサバイバーの QOL 向上を目指した支援モデルの構築
10	福島 卓矢	国立がん研究センター中央病院	がんサバイバーに対するリハビリテーション支援体制の構築

内田 恵

●名古屋市立大学病院 緩和ケア部 助教



研究課題名

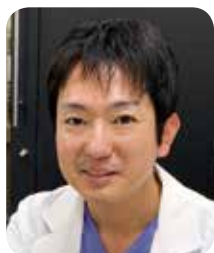
がん治療後も残存する倦怠感と精神心理的苦痛を軽減するためのウェブツールの開発

研究内容

がんサバイバーにおける治療後も残存する副作用の中で倦怠感は最も頻度が高く、QOLに影響を与えることが知られている。しかし、がん治療後の倦怠感をターゲットにした介入の中で有用なものがほとんど存在しない。そこで、私達は倦怠感を含む神経心理症状群(倦怠感、抑うつ、痛み、睡眠障害、認知機能障害)全体への多面的な介入が有用なのではないかと考えた。本研究では、神経心理症状群をターゲットとした女性がんサバイバーの治療後に残存する倦怠感を軽減するためのウェブツールを作成し、無作為化比較試験でその効果を検討する。

平山 貴敏

●国立がん研究センター中央病院 精神腫瘍科 医員



研究課題名

スクリーニングツールを活用したAYA世代がんサバイバーシップケアの開発

研究内容

AYA世代がん患者が、がん罹患後も「その人らしく」過ごせるよう医療者が支援するには、早期に個別のニーズを把握して多職種で支援する必要がある。海外ではスクリーニングツールの有効性が報告されているが、国内で妥当性が検証されたものは存在しない。そこで、本研究ではNCCN®の「Distress Thermometer and Problem List」をもとに、当院のAYA世代がん患者を対象に半構造化面接調査を実施し、その内容を検証して国内のAYA世代がん患者を対象としたスクリーニングツールを開発する。

森下 慎一郎

●新潟医療福祉大学 リハビリテーション学部 准教授



研究課題名

乳がんサバイバーの続発性リンパ浮腫を予防し、QOLを向上させるための予防的リハビリテーション方法の検討

研究内容

リンパ浮腫に対する治療の主体は弾性着衣を用いた自己管理を基盤とした保存的な治療である。一方で弾性着衣を発症前から着用して、発症そのものを予防できるかを検証している報告は極めて少なく、日本国内のものはない。本研究の目的は、手術後の乳がん患者に予防的な弾性着衣の着用をすることで続発性上肢リンパ浮腫の発症を予防し、QOLの向上を図ることである。現在、7例の乳がん患者を対象に予防的弾性スリーブ介入および評価を行っている。今後症例数を増やし統計解析を行う予定である。

松井 基浩

●東京都立小児総合医療センター 血液・腫瘍科 医員



研究課題名

AYA世代がん患者の心理社会的困難及び成長に関する調査研究 2年後コホート研究

研究内容

日本でのAYA世代がん患者の心理社会的困難及び成長に関しての全国調査は少なく、一昨年に全国調査を行った以下の3分野に関して、経時的な変化を追うため、2年後のコホート研究を実施する。

- ① AYA世代がん患者の就学、就労に関する2年後コホート研究
- ② AYA世代がん患者の恋愛、結婚に関する2年後コホート研究
- ③ AYA世代がん患者の精神・心理的問題に関する2年後コホート研究

尾瀬 功

●愛知県がんセンター がん予防研究分野 主任研究員



研究課題名

胃がん・大腸がんサバイバーの治療後のうつと関連する社会的・経済的要因の探索

研究内容

がんサバイバーは再発や死亡に対する不安や恐怖などで、うつ状態を呈することがある。この原因を特定することで、うつによるがんサバイバーのQOL低下を予防できる可能性がある。がん治療後のうつに関連する要因を明らかにすることを目的に本研究を実施した。2015年～2018年に愛知県がんセンターで治療を行った胃がん・大腸がんサバイバーを診断時から定期的に追跡し、生活習慣や心理的要因などを収集している。このデータを使用して、社会的サポートや年収など、社会的要因や経済的要因とうつ状態との関連を検討する。

関 由起子 ●埼玉大学 教育学部 教授



研究課題名

小児がん患児への特別支援教育の新たな役割：未来志向の教育に向けて

研究内容

小児がんにより長期入院を必要とする子どもたちにとって、入院期間中の教育は学習空白や遅れの補完するほか、積極性・自主性・社会性の涵養、心理的安定への寄与、病気に対する自己管理能力の育成、治療上の効果等の意義がある。しかしその意義は十分検討されず、入院中教育を受けられない児童生徒が少なからず存在した。本研究では入院中の児童生徒に必ず学校教育が提供されるためにも、病弱教育の意義を再検討する。現在先駆的な教育を行っているA病弱特別支援学校でフィールドスタディ、インタビュー、資料分析を実施、分析中である。

大塚 泰正 ●筑波大学 人間系 准教授



研究課題名

**がんサバイバーの就労を支援するキャリアカウンセリング法の開発
—働くことの意味づけと回復期の心理的適応プロセスの関連—**

研究内容

日本人がんサバイバーにとって、仕事は「生きがい」であり、就労支援は大変重要な課題である。本研究では、がん患者がどのようにスピリチュアルペインに向き合い、働くことや生きることの意味を見だしていくのか、そのプロセスを明らかにし、社会復帰や就労継続を支援するためのカウンセリング技法を開発する。これまでに、就労中のがんサバイバーに対するインタビュー調査を行った。今後は、この結果をもとに質問紙調査を実施し、就労を支援するためのキャリアカウンセリングモデルを構築する予定である。

山邊 恵里 ●筑波大学大学院 人文社会ビジネス科学学術院 博士後期課程



研究課題名

がんサバイバーのための合理的配慮—就労を通じた社会参画にむけた権利性の法的考察—

研究内容

がんの治療と仕事の両立のための取組みが社会には様々あるが、それらはがん患者の雇用を守る効力を有する法律ではない。がんになった労働者が法で守られる仕組みの不存在は、経済的基盤を雇用に頼りながら命にかかわる病気と向き合う者にとって、非常に大きな問題である。そこで本研究では、がん患者の雇用継続を支える法的アプローチを考える。具体的には、がんになった労働者に対して認められている海外における「合理的配慮」に関する検討を通じて、わが国への示唆を試みる予定である。

木下 由美子 ●宮崎大学 医学部看護学科 教授



研究課題名

前立腺がんサバイバーのQOL向上を目指した支援モデルの構築

研究内容

我が国における前立腺がんの罹患率は急増している。予後は比較的良好であり、がんと付き合いながら生活を送る期間も長い。今回、European Organization for Research and Treatment of CancerのQuality of life尺度(Elderly Cancer Patients Moduleを含む)および疾患特異的尺度やレジリエンス尺度などを用いてQOLの実態とその影響要因を分析し、前立腺がんサバイバーのQOL向上を目指した支援モデルの構築に向けた基礎資料とする。

福島 卓矢 ●国立がん研究センター中央病院 理学療法士



研究課題名

がんサバイバーに対するリハビリテーション支援体制の構築

研究内容

入院中のがん患者に対するリハビリテーションは実施されているが、外来がん患者に対するリハビリテーション支援体制は確立していない現状にある。そこで、支援体制構築に向け、研究を進めている。具体的には、がん診療連携拠点病院に対して外来がんリハビリテーションの現状、後方支援病院との連携体制の実態をアンケートにて調査し、上記課題解決のための基礎データを確立する予定である。現在、アンケートの回収作業まで終了しており、今後はデータの統合・解析へと進める予定である。

事業実績

1984～2019

I. 若手研究者の育成事業

- リサーチ・レジデント制度
- シニア・リサーチフェロー制度

II. 研究助成事業

- がん研究助成
- がんサバイバーシップ研究助成
- HOPE 研究助成
- 特別寄付金に伴う研究助成

III. 海外派遣・招へい研究助成事業

- 海外派遣研究助成
- 外国人研究者の招へい
- 日本人研究者の外国への派遣
- 外国への研究委託

IV. 技術者研修助成事業

- 看護師・薬剤師・技師等海外研修者への助成

V. 研究成果等普及啓発事業

- 国際がん研究シンポジウムの開催
- がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーの開催
- 国際がん看護セミナーの開催
- 市民公開講演会の開催
- がん患者学会の開催
- 公開セミナーの開催
- がん予防展・講演会の開催（JKA 自転車補助事業）
- レクチャーシップ（国際がん研究講演会）の開催

VI. 広報活動事業

I. 若手研究者の育成事業

■ リサーチ・レジデント制度

リサーチ・レジデントは「対がん10カ年総合戦略（1984年～）」における研究推進事業の一環として、がん研究の第一線で活躍する研究者の指導を受け、将来のわが国のがん研究の中核となる若手研究者をがん研究振興財団職員の身分で育成。

年度	国による対がん戦略	人数
1984～1993	対がん10カ年総合戦略	453
1994～2003	がん克服新10か年戦略	753
2004～2013	第3次対がん10か年総合戦略	707
2014	がん研究10か年戦略	49
	のべ総数	1,962

■ シニア・リサーチフェロー制度

2014（H26年）からの「がん研究10か年戦略」に基づくリサーチ・レジデントと異なる上級研究員を育成するため、がん研究振興財団の事業として実施。

年度	医学	歯学	理学	薬学	農学	その他	計
2015～2019	19	0	4	0	0	6	29

II. 研究助成事業

■ がん研究助成

わが国のがん研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究に対して、昭和43年、当財団創設以来毎年研究助成金を贈呈。

がん研究助成は、財団に寄せられた一般の方々からの貴重な浄財を以て実施している事業で国の各種研究助成金や、各種財団の研究助成金とは一線を画する。

● がん研究助成金実績

昭和43年度から毎年助成しており、交付者数は平成29年度までに1,000名を超える実績となっているため、以下の実績を抜粋して掲載する。

がん研究助成金交付実績（2010（H22）～2019（R1）年の10年間）

年度 （回）	2010 （43）	2011 （44）	2012 （45）	2013 （46）	2014 （47）	2015 （48）	2016 （49）	2017 （50）	2018 （51）	2019 （52）
交付件数	47	31	28	24	24	23	23	28	32	20

■がんサバイバーシップ研究助成

2014（H26）年からの「がん研究10か年戦略」に基づく「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築」を目指した研究課題に関する研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究課題に対し、指定寄付事業として研究助成金を贈呈。

年度	医師	看護師	その他	計
2015（H27）	2	6	8	16
2016（H28）	3	1	4	8
2017（H29）	5	1	5	11
2018（H30）	6	1	3	10
2019（R1）	4	2	4	10

■HOPE研究助成

1. 個別研究課題

2014（H26）年からの「がん研究10か年戦略」に基づく研究課題に対し、指定寄付事業として研究助成金を贈呈。

年度	医学	歯学	理学	薬学	その他	計
2015（H27）	1	1			3	5
2016（H28）		1	1	1	2	5

2. 海外派遣支援

2014（H26）年からの「がん研究10か年戦略」に基づく研究事業の一環として、がん研究の進歩・発展に貢献することが期待される研究者を外国の研究機関及び大学等に派遣するための助成金を贈呈。

年度	派遣先研究機関
2016	New York University Langone Medical Center Laura and Isaac Perlmutter Cancer Center
	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center

■特別寄付金に伴う研究助成

個人又は団体から用途の特定がなされる「特別寄付金」規程に基づく研究助成金を贈呈。

年度	医師	研究課題
2015（H27）	1	大腸ポリペクトミーに於いての抗凝固剤を服用されている方へのコールドポリペクトミーの有用性の検証
2016（H28）	1	超音波ガイド下経気管支針生検における新型細径針の有用性に関するランダム化比較試験

Ⅲ. 海外派遣・招へい研究助成事業

■ 海外派遣研究助成

がんを専門分野とする医師および研究者が行う海外での研究の発表・協議、施設調査、研究資料の収集などの先進的な研究活動に対して、旅費等の助成金を贈呈。

(過去15年の実績)

年度	派遣者数
2005～2013 (H17～H25)	417
2014 (H26)	31
2015 (H27)	30
2016 (H28)	27
2017 (H29)	27
2018 (H30)	20
2019 (R1)	16

■ 外国人研究者の招へい

諸外国の第一線の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者とともに国際共同研究を実施。

年度	招へい数
1984～1993 (S59～H5)	351
1994～2003 (H6～H15)	280
2004～2013 (H16～H25)	144
2014 (H26)	1
計	776

■ 日本人研究者の外国への派遣

我が国のがん研究者を外国の大学・研究機関などに派遣し、外国の研究者とともにがん最前線の研究を実施。

年度	派遣者数
1984～1993 (S59～H5)	280
1994～2003 (H6～H15)	356
2004～2013 (H16～H25)	202
2014 (H26)	3
計	841

■ 外国への研究委託

国内では実施の困難な研究などを、国際的に顕著な実績を有する外国の研究機関に委託。

年度	テーマ数
1984～1993 (S59～H5)	42
1994～2003 (H6～H15)	25
2004～2007 (H16～H19)	3
計	70

IV. 技術者研修助成事業

■ 看護師・薬剤師・技師等海外研修者への助成

がんを専門分野とする看護師・薬剤師・放射線技師等のコ・メディカルに対し、海外での先進的な研修に対して旅費等の助成金を贈呈。

年度	看護	放射線	臨床検査	薬剤	SW	理学療法士	計
2000～2003 (H12～H15)	28	11	8	10	0	0	57
2004～2013 (H16～H25)	38	52	5	37	1	3	136
2014 (H26)	2	5	0	1	0	1	9
2015 (H27)	4	2	1	1	0	1	9
2016 (H28)	0	6	0	2	0	1	9
2017 (H29)	2	5	0	1	0	2	10
2018 (H30)	3	6	0	0	0	1	10
2019 (R1)	2	4	0	1	0	0	7

V. 研究成果等普及啓発事業

■ 国際がん研究シンポジウムの開催

世界の著名ながん研究者を招いて日本人研究者とのシンポジウムを開催。

年度	テーマ
1988～1993	肺がんの基礎と臨床 尿路性器がんの基礎と臨床
	肝臓がんの基礎と臨床 膵・胆道がんの基礎と臨床
	多重がんの基礎と臨床 食道がんの基礎と臨床
1994～2003	肺がんの基礎と臨床 頭頸部がんの基礎と臨床
	大腸がんの基礎と臨床 胃がんの基礎と臨床
	脳腫瘍の基礎と臨床 乳がんの基礎と臨床
	がん検診－過去・現状・未来－
	がん性疼痛治療、緩和医療と精神腫瘍学－現状と将来の展望－
	血液腫瘍の診断と治療の最近の進歩
	膵臓がんの基礎と臨床－最近の進歩－
2004～2013	胃がんの基礎と臨床－最近の進歩－
	前立腺がんをめぐる課題と挑戦
	感染、がんと予防
	がん根治手術後の生理学的変化と QOL
	最近の放射線腫瘍学：技術の進歩と臨床導入への研究
	頭頸部・食道がんの基礎と臨床－最近の進歩－
	科学の発展を乳癌治療へ～新たなる挑戦～
	悪性脳腫瘍～現状と展望～
	放射線とがん
	世界のがん研究は今～次期対がん戦略に向けた課題～
	希少がん：望ましい医療・研究体制を探る
2014～	難治がん克服に向けた最新の治療戦略
	次世代免疫療法・ゲノム医療
	小児および AYA がん

※ 2019 年度国際がん研究シンポジウムは新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

■ がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーの開催

「がんサバイバーシップ研究助成金」交付者の研究成果報告と、がんサバイバーシップに関する正しい知識の普及を目的としたセミナーの開催。

年度	テーマ
2016	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告
	第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーシップ研究の射程と国内外の展開
2017	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告
	第2部 セミナーテーマ：今日からできるセルフケア
2018	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告
	第2部 セミナーテーマ：親の私のがんになったとき～知りたい！子どもサポート
2019	第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告
	第2部 セミナーテーマ：ケア提供者としてがんサバイバーを支えるということ

■ 国際がん看護セミナーの開催

がん患者とその家族を支える看護・医療の向上を図るための、国内外のがん看護関係者とのセミナー

年度	テーマ
2000～2003	がん看護の実践力の向上をめざして がんと向き合う人を支える
	がん看護領域の教育と実践 がんと向き合う人を支える part II
2004～2013	がん患者の自律を目指して 変革するがん看護
	これからのがん看護 変革するがん看護 part II
	これからのがん看護 part II
	がん医療における外来看護に求められる役割 part I
	がん医療における外来看護に求められる役割 part II
	がん医療における継続したがん看護の充実 part I
	がん医療における継続したがん看護の充実 part II
高齢者のがん“その人らしさを支えるがん看護と研究”～アジアの国々から～	
2014	がん医療の質向上を担うがん看護の「現在」と「発展の10年度」を問う

■ 市民公開講演会の開催

年度	テーマ
2008～2013	がん撲滅を目指して
	がん撲滅に向けた新たな挑戦－これからのがん研究の若き担い手へのメッセージ－
	がん撲滅に向けた新たな挑戦－がん研究の明日を担う方々へ－
	がん克服に向けた新たな挑戦－がん研究の明日を担う方々へ－
	がん克服に向けた新たな挑戦－がん研究はがん医療の未来へ繋ぐ－
	発がん機序からがん予防まで－研究成果と課題－
2014	がん研究と市民社会～高齢者がんとサバイバーシップ～

■ がん患者学会の開催

年度	
2015	(一社) 全国がん患者団体連合会と共催

■ 公開セミナーの開催

年度	テーマ
2015	「高齢者のがん」本当に今の治療で良いのか

■ がん予防展・講演会の開催（JKA自転車補助事業）

年度	開催会場数等
1987～1993	会場数：78 参加総数：399,055人
1994～2003	会場数：79 参加総数：248,519人
2004～2009	会場数：72 参加総数：500,425人

■ レクチャーシップ（国際がん研究講演会）の開催

年度	主な講演者名
1984～1993	ポール・A・マークス博士（アメリカ）
	ロレンソ・トマティス博士（フランス）
	クライス・ラメール博士（スウェーデン）
	サー・ウオルター・ボドマー博士（イギリス）
	ハラルド・ツール・ハウゼン博士（西ドイツ）
	ポール・H・M・ローマン博士（オランダ）
	ニコライ・N・トラベツニコフ博士（ソ連）
	A・J・マクマイケル博士（オーストラリア）
1994～2003	リチャード・H・アダムソン博士（アメリカ）
	ジルベール・ド・マシア博士（フランス）
	アンダーズ・ゼッターバーグ博士（スウェーデン）
	テランス・H・ラビッツ博士（イギリス）
	マンフレッド・F・ラジェウスキー博士（ドイツ）
	カリ・アリタロ博士（フィンランド）
	ロジャー・ワイル博士（スイス）
	ロルフ・シュルート・ハルマン博士（オーストラリア）
	アラン・バーンスタイン博士（カナダ）
	ツアン・ユーホイ博士（中国）
	ジェガブ・パーク博士（韓国）
2004～2009	カリ・ヘミンキ博士（ドイツ）
	スーザン・バンド・ホーウィッツ博士（アメリカ）
	アーサー・リッグス博士（アメリカ）
	バーネット・クレマー博士（アメリカ）
	カルロ・クローチェ博士（アメリカ）
	ローレンス・マーネット博士（アメリカ）
	ジョン・シラー博士（アメリカ）

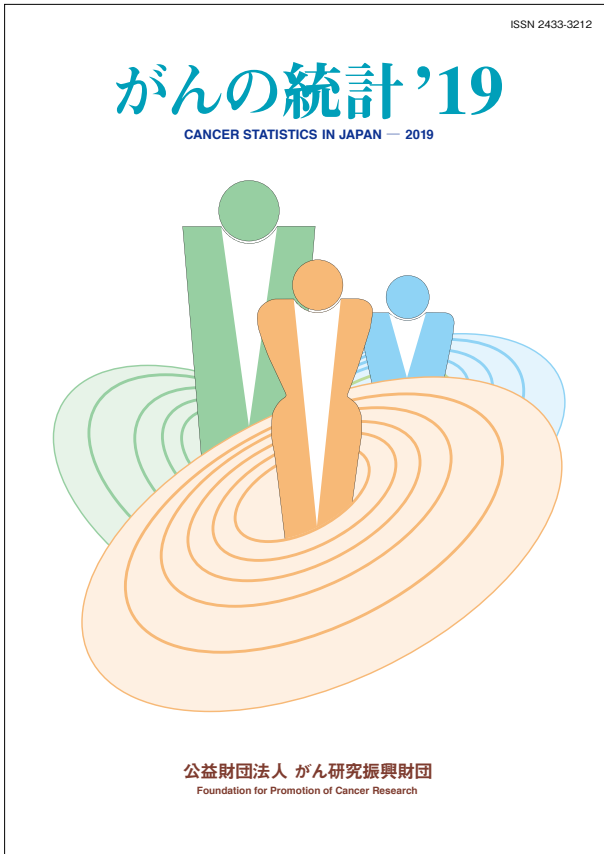
VI. 広報活動事業

● 正しいがん知識の普及・がん研究者等への資料の提供

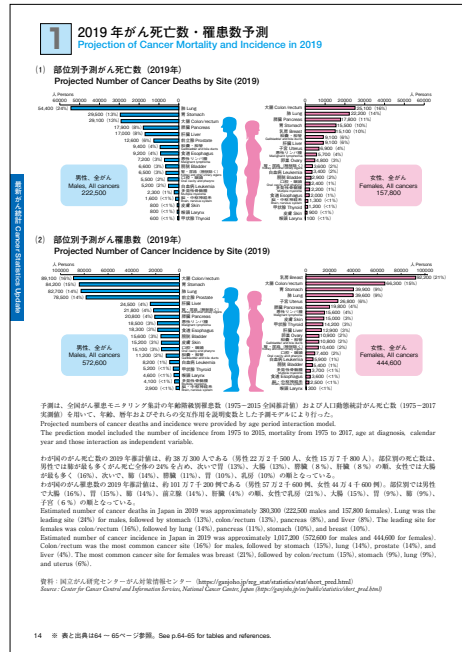
一般の方々にも理解できるがん研究に関する最新情報の提供及びがん予防の知識などを各自治体、がん診療連携拠点病院、研究機関等などのほか、全国の公立中学校にも広く情報提供。

(1) 広報活動

①がんの統計'19



本書は“わかりやすいがん統計本”として1974（昭和49）年から厚生労働省、国立がん研究センター、大阪大学、千葉県がんセンター研究所等の協力により、英訳を含めて編集した貴重な資料です。（年1回発刊）



14 累積がん罹患・死亡リスク

Cumulative Cancer Incidence/Mortality Risk

(1) 年齢階級別罹患リスク (2015年罹患・死亡データに基づく)
Age-specific Incidence Risk (Based on Incidence and Mortality Data in 2015)

部位 Site	性別 Sex	年齢 age	～49	～59	～69	～79	生涯 Lifetime	相対リスク Relative Risk
全がん All cancers	男性 Males	～39	1.1	2.6	7.7	20.9	41.6	2.1
全がん All cancers	女性 Females	～39	2.0	5.8	11.7	19.9	30.9	48.4
食道 Esophagus	男性 Males	～39	0.0	0.0	0.3	0.9	1.7	2.3
食道 Esophagus	女性 Females	～39	0.0	0.0	0.1	0.2	0.3	0.5
胃 Stomach	男性 Males	～39	0.1	0.2	1.1	2.4	7.2	11.9
胃 Stomach	女性 Females	～39	0.1	0.2	0.6	1.4	2.8	5.2
結腸 Colon	男性 Males	～39	0.1	0.2	0.8	2.1	4.0	8.2
結腸 Colon	女性 Females	～39	0.1	0.2	0.7	1.5	3.0	5.7
直腸 Rectum	男性 Males	～39	0.1	0.2	0.7	1.7	2.8	3.7
直腸 Rectum	女性 Females	～39	0.0	0.1	0.4	0.9	1.4	2.1
大腸 Colon/rectum	男性 Males	～39	0.1	0.4	1.5	3.8	6.9	9.9
大腸 Colon/rectum	女性 Females	～39	0.1	0.4	1.1	2.4	4.4	7.7
肝臓 Liver	男性 Males	～39	0.0	0.1	0.3	1.0	2.2	3.4
肝臓 Liver	女性 Females	～39	0.0	0.0	0.1	0.3	0.8	1.8
胆膵 胆嚢胆管 and 膵臓胆膵膵臓	男性 Males	～39	0.0	0.0	0.1	0.3	0.8	1.6
胆膵 胆嚢胆管膵臓	女性 Females	～39	0.0	0.0	0.1	0.2	0.5	1.5
膵臓 Pancreas	男性 Males	～39	0.0	0.1	0.3	0.8	1.6	2.5
膵臓 Pancreas	女性 Females	～39	0.0	0.0	0.2	0.5	1.1	2.4
肺 Lung, trachea	男性 Males	～39	0.0	0.2	0.8	2.8	6.0	10.0
肺 Lung, trachea	女性 Females	～39	0.0	0.1	0.5	1.4	2.8	4.8
子宮頸部 Cervix (Female) C50	女性 Females	～39	0.5	2.4	4.6	6.8	16.6	10.2
子宮体部 Uterus (Female) C53-C55	女性 Females	～39	0.4	0.9	1.7	2.3	2.7	3.2
子宮頸部 Cervix uteri C53	女性 Females	～39	0.3	0.6	0.8	1.0	1.1	1.3
子宮体部 Corpus uteri C54	女性 Females	～39	0.1	0.3	0.9	1.3	1.6	1.8
卵巣 Ovary C56	女性 Females	～39	0.1	0.2	0.6	0.9	1.1	1.9
前立腺 Prostate C61	男性 Males	～39	0.0	0.0	0.5	2.6	6.7	9.7
悪性リンパ腫 Malignant lymphoma	男性 Males	～39	0.1	0.2	0.4	0.8	1.4	2.1
悪性リンパ腫 C81-C85	女性 Females	～39	0.1	0.2	0.4	0.7	1.1	1.7
白血病 Leukemia	男性 Males	～39	0.2	0.2	0.3	0.5	0.7	0.9
白血病 C81-C95	女性 Females	～39	0.1	0.2	0.2	0.3	0.5	0.7

● 男性、女性ともに、おおよそ2人に1人が一生のうちがんと診断される (2015年の罹患・死亡データに基づく)。
● 男性ではおおよそ4人に1人、女性ではおおよそ7人に1人ががんで死亡する (2015年の死亡データに基づく)。
● One in two Japanese males and one in two Japanese females will be diagnosed with cancer during their life-time (based on incidence and mortality data in 2015).
● One in four Japanese males and one in seven Japanese females will die from cancer, based on mortality data in 2015.

※ 相対リスクは罹患率の人口構成のリスクを基に、年齢階級・性別の影響を考慮して、相対的にがん死亡リスクの割合が示される (日本では罹患率おおよそ2人に1人)。これは年齢階級の影響を考慮し、高齢化によって増加する傾向がある。
※ Relative risks in the figure probably of the population of 1 year old, which is not dependent on the age distribution of the total population. A relative index is the proportion of cancer deaths during life-time (approximately 20% in Japan), which is dependent on the age distribution and trends in future in an aging population.

資料：加藤 隆一, 日本に2015年のがん罹患リスク推計, 厚生労働省, 2015. 2015. WHO, Li M et al., Estimating lifetime and age-specific probabilities of developing cancer: Lifetime Data Anal., 1: 189-196, 1998年刊行を基に改訂した。
資料: Kato T et al., Estimating lifetime and age-specific probabilities of developing cancer: Lifetime Data Anal., 1: 189-196, 1998.

②がんを防ぐための新12か条および12か条シリーズ



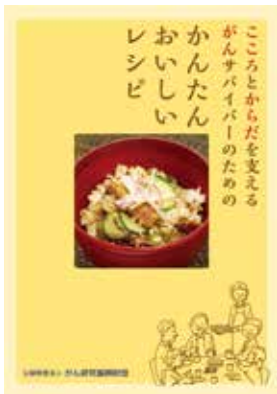
この冊子は、1978（昭和53）年から「がん予防の12箇条」としてがん予防のための生活改善情報を提供してきたものを、日本人を対象とした疫学調査などの科学的な研究で明らかにされた確かな証拠をもとに改訂を重ね、現在に至っています。



③やさしいがんの知識・がん検診（一般財団法人日本宝くじ協会の助成により作成）




④その他



(2) これまでの広報活動実績

年度	事業内容
1985～1993	がんの統計 (1974～)
	がんを防ぐための12か条 (1978～)
	やさしいがんの知識
	君たちとタバコと肺がんの話
	対がん戦略PRポスター、カレンダー
	16ミリ映画「がんに挑む」「がんから身を守るポイント」の作成 他
1994～2003	がんの統計
	がんを防ぐための12か条
	やさしいがんの知識
	君たちとタバコと肺がんの話
	がんどう付き合うか (総論・肺がん・胃がん)
	がん克服戦略PRポスター、禁煙指導用ポスター 他
2004～2013	がんの統計
	がんを防ぐための12か条
	がんを防ぐための新12か条
	やさしいがんの知識
	君たちとタバコと肺がんの話
	がんどう付き合うか (乳がん・肝がん・大腸がん・外来抗がん剤治療・子宮がん・前立腺がん・放射線治療・がんと食事・卵巣がん・食道がん・膵臓がん・緩和ケア・がんのおはなし・がん暮らし・口腔がん・子どものがん)
	予防できる「子宮頸がん」「大腸がん」
	早期発見で治そう「乳がん」
	「たばこ」がいらない、これだけの理由。 他
2014	がんの統計
	予防できる「子宮頸がん」「大腸がん」「肺がん」
	みんなで考えよう「乳がん」
	やさしいがんの知識「胃がん」
	がんを防ぐための新12か条シリーズ①喫煙とがん②飲酒とがん③食事とがん
	がん治療前の食事のヒント改訂版
	食事に困った時のヒント最新版
2015	がんの統計
	がんを防ぐための新12か条
	やさしいがんの知識「乳がん」「子宮頸がん」「大腸がん」「肺がん」
2016	がんの統計
	がんを防ぐための新12か条
	やさしいがんの知識「乳がん」「子宮頸がん」「大腸がん」「肺がん」「胃がん」
	がんを防ぐための新12か条シリーズ④運動・体形とがん ⑤感染とがん ⑦情報とがん

年度	事業内容
2017	がんの統計
	がんを防ぐための新12か条
	やさしいがんの知識「乳がん・子宮頸がん」「大腸がん」「肺がん」「胃がん」
	がんを防ぐための新12か条シリーズ⑥検診とがん
	こころとからだを支える がんサバイバーのための かんたんおいしいレシピ
	「痛み止めの薬」のやさしい知識
	知っておきたい放射線治療
2018	がんの統計
	がん治療中の食事サポートブック2018
	がん検診
	やさしいがんの知識2018
	がん治療と食生活～栄養士・歯科医・看護師からのヒント～
	こころとからだを支える がんサバイバーのための かんたんおいしいレシピ②
2019	がんの統計
	やさしいがんの知識2019
	がん検診
	がん治療における口腔支持療法のための口腔乾燥症対応マニュアル
	多職種から学ぶ：がん看護の基礎（食事を支えるケア編）



2020年度 事業計画

公益財団法人がん研究振興財団令和2年度（2020年度）事業計画を掲載しました。
本誌に掲載しております「2019年度事業実績」と併せてご確認下さい。

公益財団法人がん研究振興財団 令和2年度（2020年度）事業計画

1. 研究助成事業

(1) がん研究助成

がんに関する研究に従事する日本人研究者又はそのグループを対象として公募し、「がん研究助成審議会」の審議を経て、研究助成金を贈呈するもので、今年度で53回目を迎える。

また、看護師、薬剤師、技師（放射線・検査等）、管理栄養士、放射線医学物理士、実験動物関係技術者、臨床心理士等も対象とし、それぞれの職種における実践的研究に対し助成する。

(2) 海外派遣研究助成

がんに関する国際会議、国際学会への出席者に対して助成を行う。

研究費等で対応が困難な若手研究者等を対象とする。

2. 関係団体助成事業

UICC（国際対がん連合）の事業に対して協力助成を行い、世界、アジア等のがん対策に貢献する。

3. 技術者研修助成事業

国際交流を推進し、がん看護等の知識・技術の向上を図るため、コメディカルスタッフの海外研修留学等に対して助成を行ってきており、今年度で16年目を迎える。対象は看護師、薬剤師、放射線技師、管理栄養士、臨床検査技師、ソーシャルワーカー等とする。

4. がんになっても生きる希望を持てる事業（HOPE事業）

「がん研究10か年戦略」による研究支援事項を継続的に推進していくため、幅広い分野の柔軟な発想を持った若手の人材を研究領域に取込むための戦略的育成等の研究支援を行う。

5. 「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築をめざした研究」課題解決に向けた支援事業

「がん研究10か年戦略」の具体的研究事項として「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築をめざした研究」が課題とされており、患者本人や家族が本来の生活の場所（家庭、職場、学校、地域コミュニティなど）で暮らしていく過程で直面する様々な課題解決に関する研究の支援を行う。

6. 多様化する情報ニーズに対応するためエビデンスに基づいた国民への薬物療法等の情報提供支援事業

科学的根拠に基づく情報を迅速に提供するため臨床試験情報及び薬物療法プロトコール情報等に関する諸問題や個別目標に直接寄与するための事業を支援する。

7. 研究成果等普及啓発事業

シンポジウムや研究成果発表会等を一般向けに開催する。

また、がん研究の成果を国民にフィードバックする観点から、各種情報媒体を活用し普及啓発に努める。

8. 広報活動事業

がん研究の成果を国民にフィードバックするため、ホームページの充実やパンフレット等を作成し、全国の学校や保健所・診療機関等に配布し、がん予防やがんの正しい知識のわかりやすい情報提供に努める。

ご寄付 芳名録

2019年度におきましても、多くの方々からご寄付をいただき、誠に有難うございました。ここにご芳名をご披露させていただきます。

これらのご寄付は、がんで亡くなられた方のご遺志を活かすために寄せられたもの、がんと闘ったことのあるご本人から寄せられたもの、そして、その他一日も早くがんの克服されることを願う方々から寄せられたものです。

当財団と致しましては、貴重なご芳志にお報いするため、がん克服を目指す研究や診療の進歩に有効に活用させていただきますことをお願いして、お礼に代えさせていただきます。

公益財団法人 がん研究振興財団
理事長 堀田 知光

2019年度（平成31年4月1日～令和2年3月31日）

住 所	氏 名
千葉県	鈴木 広 晃 様
東京都	国立がん研究センター中央病院 放射線治療部・診断部 様
広島県	野 中 俊 志 様
埼玉県	岡 戸 洋 一 様
兵庫県	池 田 恢 様
千葉県	高 橋 敦 子 様
神奈川県	川 口 美知子 様

（ご承諾を頂いた方のみ受付順に掲載しています）
他 総件数 41件

ご寄付に添えられたお言葉の一部を 紹介させていただきます。

- 香典返しを三世代、研究機関への寄付を行っており、この度も貴団への寄付と致します。
- 沢山の方からのお気持ちが集まったものです。何卒宜しくお願い致します。
- 財団の気持ちを応援いたします。
- 夫（食道がんステージ4）がモルヒネのオプソ内服薬や座薬やフェイントテープ（貼り薬）を処方されましたが、せん妄などの副作用が出て痛ましく思いました。もっと安らかに逝けるよう進歩、研究して下さいようお願い致します。
- わずかばかりですが、ご寄付をさせていただきます。先日、発見から4ヶ月の闘病で逝った母のデータが同じすい臓がんで苦しむ方々のお役に立ちますように。がんが風邪のごとくあっという間に治る日が来ますように。

～ご厚志ありがとうございました～

ご寄付についての お問い合わせ先

お問い合わせは下記までお願い致します。ご寄付の申し込みを希望される方には寄付申込書、銀行及び郵便局の振込用紙（払込手数料は不要）、特定公益増進法人であることの証明書（寄付金控除等の税法上の特典が受けられる）等の関係資料をお送りさせていただきます。

〒104-0031
東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階
公益財団法人 がん研究振興財団
TEL 03(6228)7297 FAX 03(6228)7298
E-mail : info@fpcr.or.jp
ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/contribution.html>

公益財団法人がん研究振興財団 役員

令和元年5月1日

会 長	荒蒔 康一郎	(キリンホールディングス株式会社 元会長)
理事長	堀田 知光	(国立研究開発法人国立がん研究センター 名誉総長)
理 事	石塚 正敏	(跡見学園女子大学 教授)
同	上田 龍三	(愛知医科大学医学部 教授)
同	垣添 忠生	(公益財団法人日本対がん協会 会長)
同	関谷 剛男	(公益財団法人佐々木研究所 常務理事・研究所長)
同	田中 利彦	(田中綜合法律事務所 代表弁護士)
同	中釜 齊	(国立研究開発法人国立がん研究センター 理事長)
同	山口 俊晴	(公益財団法人がん研究会有明病院 名誉院長)
監 事	亀口 政史	(亀口公認会計士事務所 所長)
顧 問	大竹 美喜	(公益財団法人がん研究振興財団 前会長)
同	高山 昭三	(公益財団法人がん研究振興財団 前理事長)

公益財団法人がん研究振興財団 評議員

令和2年3月1日

石田 昌宏	(参議院議員)
木村 政之	(日本製薬団体連合会 顧問)
久保田 政一	(一般社団法人日本経済団体連合会 事務総長)
澁谷 正史	(上武大学 学長)
菅野 純夫	(千葉大学未来医療教育研究機構 特任教授)
田島 和雄	(三重大学大学院医学系研究科 客員教授)
野田 哲生	(公益財団法人がん研究会 代表理事・常務理事 研究所長)
宮園 浩平	(東京大学大学院医学系研究科 教授)
村上 善則	(東京大学医科学研究所 教授)

あとがき

機関誌「加仁 第47号」の発刊に当たりまして執筆、ご寄稿頂きました皆様に心より御礼申し上げます。

今年は56年ぶりの東京オリンピック開催ということで、明るく希望に満ちた記念の年となるところで、新型コロナウイルス感染症が世界規模で発生し、わが国でも緊急事態宣言が発令され、その動向に不安な日々が続いています。1日も早い終息を願うばかりです。

特に医療の最前線で対応されている医師、看護師をはじめとする医療スタッフの方々には、刻々と厳しさを増す診療体制の中でご尽力頂いておりますが、健康面には十分ご留意下さいますようお願いするとともに、心からの感謝と敬意を表します。

さて今号では、京都大学教授の田村 恵子先生に巻頭言及び特集欄の執筆をお願いし、特集欄では「がん看護専門看護師」、「ともいき京都代表」として本年2月に開催されたがんサバイバーシップセミナーでの講演内容等を解りやすくまとめて頂きました。

田村先生のご講演に当っては、多くの看護師さんや患者会関係者の皆様からのご要望をいただき、実現致しました。紙面をお借りしここに御礼を申し上げます。

「がんサバイバーシップ研究支援事業」については、国の施策に沿った事業として唯一当財団が5年間にわたり実施してきた研究助成事業です。

また、例年開催されております「国際がん研究シンポジウム」については、3月26・27日の2日間、国立がん研究センター研究所長の間野 博行先生に組織委員長をお願いし、「がんゲノム医療の現状と未来」をテーマにがんのゲノム医療の研究開発から情報利活用まで幅広く、米国・韓国を含めたトップランナーの方々による講演を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、誠に残念ですが開催を中止致しました。今号では特集欄を設け、間野先生からのメッセージを掲載させて頂きました。

然るべき時期に同テーマのシンポジウムが開催できればと思っております。

なお、最終項に今年度実施予定の事業計画を新たに掲載させて頂きました。「多様化する情報ニーズに対応するためエビデンスに基づいた国民への薬物療法等の情報提供支援事業」を新たに実施すべく、情報発信事業への強化を図ることとしております。

次号にて本年度事業の執行状況がご紹介できるよう事務局一同業務に精励する所存ですので、皆様にはより一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

(T. N)

か仁

第47号 2020

令和2年4月発行

編集

代表 堀田 知光

発行

公益財団法人 がん研究振興財団

〒104-0031

東京都中央区京橋2-8-8

新京橋ビル5階

TEL 03(6228)7297

FAX 03(6228)7298

ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/>

全国がんセンター協議会加盟施設一覧表

(平成30年1月現在)

北海道がんセンター	〒003-0804 札幌市白石区菊水4条 2-3-54	☎(011)811-9111
青森県立中央病院	〒030-8553 青森市東造道 2-1-1	☎(017)726-8111
岩手県立中央病院	〒020-0066 盛岡市上田 1-4-1	☎(019)653-1151
宮城県立がんセンター	〒981-1293 名取市愛島塩手字野田山 47-1	☎(022)384-3151
山形県立中央病院	〒990-2292 山形市大字青柳 1800	☎(023)685-2626
茨城県立中央病院	〒309-1793 笠間市鯉淵 6528	☎(0296)77-1121
栃木県立がんセンター	〒320-0834 宇都宮市陽南 4-9-13	☎(028)658-5151
群馬県立がんセンター	〒373-8550 太田市高林西町 617-1	☎(0276)38-0771
埼玉県立がんセンター	〒362-0806 北足立郡伊奈町小室 780	☎(048)722-1111
国立がん研究センター東病院	〒277-8577 柏市柏の葉 6-5-1	☎(04)7133-1111
千葉県がんセンター	〒260-8717 千葉市中央区仁戸名町 666-2	☎(043)264-5431
国立がん研究センター中央病院	〒104-0045 中央区築地 5-1-1	☎(03)3542-2511
がん研有明病院	〒135-8550 江東区有明 3-8-31	☎(03)3520-0111
東京都立駒込病院	〒113-8677 文京区本駒込 3-18-22	☎(03)3823-2101
神奈川県立がんセンター	〒241-8515 横浜市旭区中尾 2-3-2	☎(045)520-2222
新潟県立がんセンター新潟病院	〒951-8566 新潟市中央区川岸町 2-15-3	☎(025)266-5111
富山県立中央病院	〒930-8550 富山市西長江 2-2-78	☎(076)424-1531
石川県立中央病院	〒920-8530 金沢市鞍月東 2-1	☎(076)237-8211
福井県立病院	〒910-8526 福井市四ツ井 2-8-1	☎(0776)54-5151
静岡県立静岡がんセンター	〒411-8777 駿東郡長泉町下長窪 1007	☎(055)989-5222
愛知県がんセンター	〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿 1-1	☎(052)762-6111
名古屋医療センター	〒460-0001 名古屋市中区三の丸 4-1-1	☎(052)951-1111
滋賀県立総合病院	〒524-8524 守山市守山 5-4-30	☎(077)582-5031
大阪医療センター	〒540-0006 大阪市中央区法円坂 2-1-14	☎(06)6942-1331
大阪国際がんセンター	〒541-8567 大阪市中央区大手前 3-1-69	☎(06)6945-1181
兵庫県立がんセンター	〒673-8558 明石市北王子町 13-70	☎(078)929-1151
呉医療センター・中国がんセンター	〒737-0023 呉市青山町 3-1	☎(0823)22-3111
山口県立総合医療センター	〒747-8511 防府市大字大崎 10077	☎(0835)22-4411
四国がんセンター	〒791-0280 松山市南梅本町甲 160	☎(089)999-1111
九州がんセンター	〒811-1395 福岡市南区野多目 3-1-1	☎(092)541-3231
佐賀県医療センター好生館	〒840-8571 佐賀市嘉瀬町大字中原 400	☎(0952)24-2171
大分県立病院	〒870-8511 大分市大字豊饒 476	☎(097)546-7111

※全国がんセンター協議会HPより

全国がんセンター協議会に属しているこれらの施設は、がんの専門医を多数擁して、がんの診断と治療に積極的に取り組んでいます。

当財団の事業活動の多くは、皆様からの尊いご寄付により
支えられています。
皆様のご理解とご支援ご協力をお願い申し上げます。

がんを防ぐための **新** 12か条

あなたのライフスタイルをチェック
そして今日からチェンジ!!



- 1 条 たばこは吸わない

- 2 条 他人のたばこの煙を避ける

- 3 条 お酒はほどほどに

- 4 条 バランスのとれた食生活を

- 5 条 塩辛い食品は控えめに

- 6 条 野菜や果物は不足にならないように

- 7 条 適度に運動

- 8 条 適切な体重維持

- 9 条 ウイルスや細菌の感染予防と治療

- 10 条 定期的ながん検診を

- 11 条 身体の異常に気がいたら、すぐに受診を

- 12 条 正しいがん情報でがんを知ることから

発行 公益財団法人 がん研究振興財団
〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階
TEL 03 (6228) 7297
FAX 03 (6228) 7298
E-mail: info@fpcr.or.jp
ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/>